

注文帳

泉鏡花

青空文庫

剃刀研

十九日

紅梅屋敷

作平物語

夕空

点灯頃

雪の門

二人使者

左の衣兜

化粧の名残

剃刀研

一

「おう寒いや、寒いや、こりやべらぼうだ。」

と天窓あたまをきちんと分けた風俗、その辺の若い者。双子ふたごの着物に
白ツぽい唐棧とうざんの半纏はんてん、博多はかたの帯、黒八丈の前垂まえだれ、白綾しろりんず子
に菊唐草浮織の手巾ハンケチを頸うなじに巻いたが、向風むこうかぜに少々鼻下を赤
うして、土手からたらたらと坂を下り、鉄漿溝おはぐろどぶというのについ
て揚屋町あげやまちの裏の田町の方へ、紺足袋ひよりげたに日和下駄、後の減つたる

しろもの代物、一体なら此こいつ奴豪勢はすに発奮はつじんむのだけれども、一進いっしんが一十じゅう、
につぼち二八の二月で工面こうめんが悪わるし、霜枯しもがれから引続き我慢がまんをしているが、
とかく気になるといふ足取あしどり。

ここに金きん鍔屋つばや、荒物屋、煙草屋たばこ、損料屋、場末の勸工場かんこうば見
るよう、狭い店のごたごたと並んだのを通越すと、一間口けんに看板
をかけて、丁寧ていねいに絵にして剪刀はさみと剃刀かみそりとを打違ぶつちがえ、下に五す
けと書いて、親仁おやしが大目金めがねを懸かけて磨桶とぎおけを控とえ、剃刀の刃を合
せている図、目金と玉と桶の水、切物きれものの刃を真蒼まつさおに塗ぬつて、
あとは薄墨うすすみでぼかした彩色さいしき、これならば高尾の二代目三代目時
分かむろつかいの禿かぶが使つかに來きても、一目ひとめして研屋とぎやの五助である。

敷居の内は一坪ばかり凸凹とつこのたたき土間。隣のおでん屋の屋台

が、軒下から三分が一ばかり此方の店前を掠めた蔭に、古布子で平胡坐、継はぎの膝かけを深うして、あわれ泰山崩るるといへども一髪動かざるべき身の構え。砥石を前に控えたは可いが、怠惰が通りものの、真鍮の煙管を脂下りに啣えて、けろりと往来を視めている、つい目と鼻なる敷居際につかつかど入ったのは、件の若い者、捨どんなり。

手を懐にしたまま胸を突出し、半纏の袖口を両方入山形という見得で、

「寒いじゃあねえか、」

「いやあ、お寒う。」

「やっぱりそれだけは感じますかい、」

親仁は大口を開いて、啣えた煙管を吐出すばかりに、

「ははははは、」

「暢氣のんきじゃあ困るぜ、ちつと精を出しねえな。」

「一言もござりませんね、ははははは。」

「見や、それだから困るてんじやあねえか。ぼんやり往来を見ていたって、何も落して行く奴やつアありやしねえよ。しかも今時分、

よしんば落して行った処ところにしろ、お前何だ、拾つて店へ並べておきや札をつけて軒下へぶら下げておくと同おんなじ一で、たちまち鳶とんびト

ーローローだい。」

「こう、憚はばかりだが、そんな日いわくつき附つきの代物は一ツも置いちやあね

え、出処でどこの確たしかなものばツかりだ。」と件のくだんのみさしを行火あんかの火入

へぽんと払はたいた。真鍮まねのこの煙管えんくわんさえ、その中に置いたら異彩を
放ちそうな、がらくた沢山、根附ねつけ、緒お々々《おじめ》の類たぐい。古庖丁、
塵劫記じんこうきなどを取交せて、石炭箱を台に、雨戸あまどを横よこえ、赤毛布あかげつと
を敷いて並べてある。

「いずれそうよ、出処たしかは確たしかなものだ。川尻かわしり権守ごんのかみ、溝中どぶのなか長

左衛門さゑもんね、掃溜はきだめ衛門之介ゑもんなどからお下り遊あそばしたろう。」

「愚哉おろか々々、これ黙もくらつせえ、平たいらの捨吉すてきち、汝なんじ今頃この処こゝに来きたつて、

憎にくまれ口くちをきくようじゃあ、いかさま地じいろが無なえものと見える

。」と説破せつぱ一番して、五助はぐツとまた横よこ啣くわえ。

平へいの捨吉すてきちこれを聞くと、壇だんの浦没落うらぼつらくの顔がん色しよくで、

「ふむ、余あまり殺生ころしやうが過ぎたから、ここん処こゝ精進しやうじんよ。」と戸外おもての方

へ目を反す。そら狭い町を一杯に、ひるがえり昼帰を乗せてがらがらがら。

二

あとは往来がぼったり絶えて、魔が通る前後あとさきの寂たる路みちかな。
 如月十九日の日がまともにさして、土には泥ぬかるみ濘を踏んだ足跡あと
 も留めず、さりながら風は颯々さつさつと冷く吹いて、遙はるかに高い処はたきで払
 をかける。

「串じょうだん戯じやあねえ、」と若い者は立直つて、
 「紺屋こうやじゃあねえから明後日あさってとは謂いわせねえよ。楼うちの妓おいらん衆ちんたち
 から三挺ちようばかり来てる筈はずだ、もう疾とつくに出来てるだろう、大急ぎ

だ。」

「へいへい。いやまた家業の方は真面目まじめでございす、捨さん。」

「うむ、」

「出来てるにや出来てます、」と膝かけからすぼりと抜けて、行あ火んかを突出しながらずいと立つ。

若いものは心付いたように、ハアトと銘のあるのを吸いつける。

五助は背後うしろむき向になつて、押廻して三段に釣った棚に向い、右

から左のへ三度ばかり目を通すと、無慮四五百挺かみそりの剃刀の中か

ら、箱を二挺、紙にくるんだのを一挺、目方を引くごとくてのひら掌に据

えたが、捨吉に差向けて、

「これだ、」

「どれ、」

箱を押すとすツと開いて、研澄とぎすましたのが素直まっすぐに出る、裏書をちよいと視ながめ、

「こりや青柳あおやぎさんと、可よし、梅の香さんと、それから、や、こりや名がねえが間違やしないか。」

「大丈夫、」

「確たしかかね。」

「千本ゴツたになつたつて私わっしが受取つたら安心だ、お持ちなせえ、したが捨さん、」

「なあに、間違つたつて剃刀だあ。」

「これ、剃刀だあじゃあねえよ、お前めえさん。今日は十九日だぜ。」

「ええ、驚かしちやあ不可^{いけね}え、張^{はりみせ}店の遊^{おいらん}女に時刻を聞くのと、十五日過^{すぎ}に日をいうなあ、大の禁物だ。年代記にも野暮の骨頂としてございますな。しかも今年は閏^{うるう}がねえ。」

「いえ、閏があるうとあるまいと、今日は全く十九日だろうな。」と目金越^{のぞ}に覗^{のぞ}き込むようにして謂^いったので、捨吉は変な顔。

「どうしたい。そうさ、」

「お前^{めえ}さん楼^{とこ}じゃあ構^{かま}わなかつたつけか。」

「何を、」

「剃刀をさ。」

謂^いうことはのみ込めないけれども、急に改^かまって五助が真面目だから、聞くのも気がさして、

「剃刀を？ おかしいな。」

「おかしくはねえよ。この頃じやあ大抵何楼どこでも承知の筈だに、どうまた気が揃ったか知らねえが、三人が三人取りに寄越よこしたのはちつと変だ、こりやお気をつけなさらねえと危あぶえよ。」

ますます怪訝けげんな顔をしながら、

「何も変なこたアありやしないんだがね、別に遊おいらん女たちが気を

揃えてというわけでもなしさ。しかしあたらうというのは三人や四人じやあねえ、遣やれるもんなら楼うちに居るだけ残らずというのよ

。

「皆みんなかい、」

「ああ、」

「いよいよ悪かろう。」

「だってお前、めえ床屋が居続けをしていると思や、不思議はあるめえ。」

五助は にがわらい 苦笑をして、

「洒落しやれじゃあないというに。」

「何、洒落じゃあねえ、まったくの話だよ。」と若いものは話に念が入って、仕事場の前に腰を据えた。

十九日

「昨夜ゆうべひけ過すぎにお前めえ、威勢よく三人で飛込んで来た、本郷辺の職人てあい徒あさ。今朝になつて直すというから休業やすみは十七日だに變だと思ふと、案の定なんだろうじやあないか。

すつたもんだと捏こねかえしたが、言種いぐさが気に入つたい、総勢二十一人というのが昨日きのうのこつた、竹の皮包の腰兵糧でもつて巢す鴨がもの養育院がもというのに出かけて、施ほどこしのちよきちよきを遣やつてさ、総そうがかりで日の暮れるまでに頭の数そく五百と六十が処片せづけたといふ奇特な話。

その崩くずれが豊国へ入つて、大廻りに舞台が交かわると上野の見晴みはらしで

勢せいぞろい揃そろというのだ、それから二人三人にんずつ別れ別れに大門へ討う入ちいりで、格子さきで冑首かぶとと見ると名乗なのりを上げた。

もとよりひつてんは知れている、ただは遁にげようたあ言わなから、出来るだけ仕事をさせろ。愚ぐず図々々吐ぬかすと、処々に伏ふせ勢せいは配はつたり、朝鮮伝来の地雷火が仕懸かけけてあるから、合図の煙管きせるを払はくが最後、芳原は空くうへ飛ぶぜ、と威勢いせいの好い懸かけ合あいだから、一番景気だと帳場でも買ったのさね。

そこで切味の可いいのが入用というので、ちようどお前めえん処とこへ頼たのんだのが間に合うだろうと、大急ぎで取りに来たんだが、何かね、十九日がどうかしたかね。」

「どうのこうのって、真面目なんだ。いけ年としつかまつを仕つかまつつて何も万八を

極めるにや当りません。」

「だからさ、」

てえげえ

「大概御存じだろうと思うが、じやあ知らねえのかね。この十九日というのは厄日でさ。別に船頭衆がせんどしゆう大晦日おおみそかの船出をしねえというような極きまったんじやアありません。他ほかの同商売にはそんなことは無ねえようだが、廓中くるわのを、こうやつて引受けてる、私許うちばかりだから忌いやじやあねえか。」

「はて——ふうむ。」

「見なさる通りこうやつて、二百そく三百と預つてありましよう。殊にこれなんざあ御銘々使い込んだ手加減があろうというもんだから。そうでなくツたつて粗末にやあ扱いません。またその癖誰も

これを一挺ちようどうしようと言うのも無ねえてツた勘定だけれど、数のあるこツたから、念にやあ念を入れて毎日一度ずつは調べるがね。紛ふんじつ失するなんてえ馬鹿げたことはない筈はずだが、聞きなせえ、今日だ、十九日というと思議に一挺ちようずつ失なくなります。」

「何が、」と変な目をして、捨吉は解わかったようのみこで吞込めない。

「何がツたつて、預うちつてる中のさ。」

「おお、」

「ね、御覧なせえ、不思議じゃありませんかい。私わつしもどうやらこうやら皆みなさん様で鼻ひいき屑にして、五助のでなくツちやあ齒切はぎれがしねえと、持込んでくんなさるもんだから、長年居附いて、婆ばばどももここで見送ったというもんだ。先せんの内もちよいちよい紛失したこ

とがあるにやあります。けれども何の気も着かねえから、そのた
んびに申訳をして、事済みになりくしたんだが。

毎々のことでしよう、気をつけると毎月さ、はて変だわえ、と
それからいつでも寝際にやあちやんと、ちゆう、ちゆう、たこ、
かいなのちゆう、と遣ります。

いつの間にか失くなるさ、怪けしからねえこつたと、大きに考え
込んだ日が何でも四五年前だけけれど、忘れもしねえ十九日。

聞きなせえ。

するとその前の月にも一昨日おととい持って来たとツて、東屋あずまやの都みやこ
う人しんぞしゆうのを新造衆しんぞしゆうが取りに来て、

五助は振向うしろいて背後くだんの棚、件の屋台の蔭まぜまではあり、間狭まぜまなり、

日は当らず、剃刀ばかりで陰気なのを、目金越に見て厭いやな顔。

四

「と、ここから出そうとすると無かろうね。探したが探したがさあ知れねえ。とうとう平あやまりのこつち凹へこみ、先方様さきさまむくれと
なつたんだが、しかも何と、その前の晩気を着けて見ておいたん
じゃアあるまいか。

持って来たのが十八日、取りに来たのが二十日の朝、検しらべたの
が前の晩なら、何でも十九日の夜中だね、希代なのは。」
「へい、」と言って、若い者は巻煙草まきたばこを口から取る。

五助は前まえ屈かみに目金を寄せ、

「ほら、日が合つてましよう。それから氣を着けると、いつかも江戸町のお喜き乃さんが、やつぱり例の紛失で、ブツブツいつて歸けえつたツけ、翌あくるひ日の晩方、わざわざやつて来て、

(どうしたわけだか、鏡台の上に、)とこうだ。私許うちへ預つて、取りに来て失うせたものが、鏡台の上にあるは、いかがでござい。

鏡台の上はまだしもさ、悪くすると十九日には障子の棧さんなんぞに乗つかつてる内があるツさ。

浮舟さんが爛部屋かんべやに下つていて、七日なぬかばかり腰が立たねえでさ、夏のこツた、湯へ入へつちやあ不可いけえと固く留められていたのを、
悪わる汗あせが酷ひどいといつて、中なか引び過ぎに密そツと這出はいだして行つて湯殿

口でぎっくり膝を切つて、それが許もとで亡くなつたのも、お前めえ、剃刀がそこに落ッこちていたんだそうさ。これが十九日、去年の八月知つてるだろう。

その日も一挺紛失さ、しかしそりや浮舟さんの楼うちのじやあねえ、確か喜怒きぬがわ川の緑さんのだ、どこへどう間違つて行くゆのだから知れねえけれども、厭いやじゃあねえか、恐しい。

引ひっくるめて謂いや、こつちも一挺なくなつて、廊内くるわうちじやあきつと何楼どこかで一挺だけ多くなる勘定だね。御入用のお客様はどなただか早や知らねえけれど、何でも私わつしが研澄とぎすましたのをお持ちなさると見えるて、御念の入つた。

澆ぼっとしちやあ、お客にまで気を悪くさせるから伏せてはあろう

が、お前さんだ、今日は剃刀を扱わねえことを知っていそうなもんだと思うが、楼うちでも気がつかねえでいるのかしら。」

「ええ！ほんとうかい、お前めえとは妙に懇意だが、実は昨今だから、……へい？」と顔の筋を動かして、眉をしかめ、目を睜みはると、この地色の無い若い者は、思わず手に持った箱を、ぼったり下に置く。

「ええ、もし、」

「はい。」と目金を向ける、気を打った捨吉も斉ひとしく振向くと、皺しやが喰くれた声で、

「お前さん、御免なさいまし。」

敷居際に蹲つくばった捨吉が、肩のあたりに千草色の古股引ふるももひき、垢あかじ

みた尻切半纏しりぎりばんてん、よれよれの三尺、胞衣えなかと怪あやしまれる帽かぶを冠かぶつて、手拭てぬぐいを首くびに巻まき、引出し附ひきだしづのがたがた箱はこと、海鼠形なまこなりの小こ鹽だらい、もう一ツ小鹽かきを累かさねたのを両方振分りょうほうぶんにして天秤てんびんで担たいだ、六十ばかりの親仁おやし、瘡やせさらばい、枯木かきに目めと鼻はなとのついた姿すがたで、さもさも寒ふそう。

捨吉すてきちは袖そでを交まじわして、ひやりとした風かぜ、つつけんどんなもの謂いで、

「何なにだ、」

「はい、もしお寒いこつてござります。」

「北風ならいのせいだな、こちとらの知しつたこつちやあねえよ。」

「へへへへへ、」と鼻はなの尖さきで寂さみしげなる笑えみを洩もらし、

「もし、唯今ただいまのお話は、たしか幾日いくかだとかおつしやいましたね。」

五

五助は目金越めかねこに、親仁の顔を瞻みまもっていたが、

「やあ作平さくへいさんか、」と行って、その太わくの面道具おもてどうぐを耳みみから捻ねじり取るよう、撈もぎはなして膝の上。口をこすつて、またたいて、

「飛んだ、まあお珍しい、」と知った中。捨吉間すてきちまが悪わるかったものと見え、

「作平さん、かね。」と低声こゝろえで口の裡うち。

折から、からからと後齒あとばの蹺音あしおと、裏口ではたと留やんで、

「おや、また寝そべってるよ、凶こごと々しい、」

叱言こごとは犬か、盗人ぬすつとねこ猫か、勝手口の戸をあけて、ぴツしやりと

蓮葉はすはにしめたが、浅間あまだから直じきにもう鉄瓶をかちりといわせて、

障子の内に女の氣勢けはい。

「唯今。」

「帰けえんなすったかい、」

「お勝さん？」と捨吉は中腰に伸上りながら、

「もうそんな時分かな。」

「いいえ、いつもより小一時間遅いんですよ、」

という時、二枚立だてのその障子の引手の破目やぶれめから仇々あだあだしい目
 が二ツ、頬のあたりがほの見えた。蓋けだし昼の間寐うちねるだけに一間の
 半なかばを借り受けて、情事いろごとで工面の悪い、荷物なしの新造しんぞが、京町
 あたりから路地づたいに今頃戻つて来るとのこと。

「少し立込んだもんですからね、」

「いや、御苦労様、これから緩ゆつくりとおひけに相成あいなりますか？」

「ところが不可いけないの、手が足りなくツて二度の勤つとめと相成あいなります
 。

「お出懸でかけか、」と五助。

「ええ、困るんですよ、昨夜ゆうべもまるつきり寐ねないんですもの、身か
 体からだ中ちゆうぞくぞくして、どうも寒いじゃありませんか、お婆さんおば堪たま

らないから、もう一枚下へ着込んで行きましようと思つて、おお、寒い。」といつてまた鉄瓶をがたりと遣る。

さらぬだに震えそうな作平、

「何てえ寒いこつてございませう、ついぞ覚えませぬ。」

「はつくしよい、ほう、」と呼吸を吹いて、堪りかねたらしい捨

吉続けざまに、

「はつくしよい！ ああ、」といつて眉を顰め、

「噂かな、恐しく手間が取れた、いや、何しろ三挺頂いて歸りま

しよう。薄気味は悪いけれど、名にし負う捨どんがお使者でさ、

しかも身替を立てる間奥の一間で長ツ尻と来ていらあ。手ぶら

でも歸られまい。五助さん、ともかくも貰つて行くよ。途中で自

然のずからこの蓋ふたが取れて手が切れるなんざ、おつと禁句、「とこの際、障子の内へ聞かせたさに、捨吉相方なしの台辞せりふあり。

五助はまめだつて、

「よくそう謂いいなせえよ、」

「十九日かね、」と内からいう。

「ええ、御存じ、」といいながら、捨吉腰を伸のばしてずいと立った。

「希代だわねえ。」

「やっぱり何でございますかい、」と作平はこれから話す氣、振ふりかえて、荷おろを下し、屋台へ天秤を立てかける。

捨吉はぐいと三挺、懷へ突込みそうにしたが、じつと見て、

「おツと十九日。」

という処へ、荷車が二台、浴衣の洗濯を堆く積んで、小僧が三
 人寒い顔をしながら、日向ひなたをのツしりと曳ひいて通る。向うの路地
 の角なる、小さな薪屋まきの店前みせさきに、炭団たどんを乾かした背後うしろから、子
 守がひよいと出て、ばたばたと駆けて行く。大音寺前あたりで飴あめ
 屋の囃子はやし。

紅梅屋敷

その荷車と子守の行ゆきちが違ちがつたあとに、何にもない真赤まっかな田町の細路へ、捨吉がぬいと出る。

途端にちりりんと鈴りんの音、袖に擦合うばかりの処へ、自転車一輛、またたきする間もあらせず、

「危い、」と声かけてまた一輛、あつと退すきると、耳みみもと許へ再び、ちりちり！

土手の方から颯さつと来たが、都合三輛か、それ或あるいは三羽びきか、三疋びきか、燕つばめか、兎か、見分けもつかず、波の揺れるようにたちまち見えなくなつた。

棒立ちになつて、捨吉茫ぼうぜん然と見送りながら、

「何だ、一文も無ねえ癖に、」

「汝^{てめえ}じゃアあるまいし。」

「や、」

「どうした。」

「へい、」

「近頃はどうかだ、ちったあたりでもついたか、汝^{てめえ}、桐島のお消^{けし}に大分執心だというじゃあないか。」

「どういたしまして、」

「少しも御遠慮には及ばぬよ。」

「いえ、先方^{さき}へでございます、旦那^{だんな}にじゃあございませぬ。」

「そうか、いや意気^{いくじ}地の無い奴^{やつ}だ。」と腹蔵^{はらぞう}の無い高^{たか}笑^{わらい}。少^す禿^{こはげ}天窓^{あたま}てらてらと、色づきの好^い顔^{かお}容^{かたち}、年配は五十五六、

結城ゆうぎの襲衣かさねに八反ひらぐけの平紵へいぢゆ、棒縞ぼうしまの綿わた入いれ半纏はんてんをぞろりと羽織はおりつて、白縮緬しろちりめんの襟卷えりまきをした、この旦那だんなと呼ばれたのは、一一ふたか
みやとうさぶろう
 上屋藤三郎みやとうさぶろうという遊女屋あそびぢやの亭主ていしゆで、廓内くわくわの名望家なぼうか、当時見番みばん
とりしまり
 の取締とりしまりを勤めているのが、今向むこうの路地の奥おくからぶらぶらと出たのであつた。

界限かいわいの者が呼んで紅梅屋敷べんばいぢやという、二上屋にじやうぢやの寮しやうは、新築しんぢやくして
 実にその路地の突つきあたりあたり、通とおの長屋並ながぢやならびの屋敷越ぢやくに遠くちらちらと
くれない
 ある紅くれないは、早さきや咲初さきそめた苔つぼみである。

捨吉あらかは更あらためて、腰かかを屈かめて揉手もみでをし、

「旦那御一所に。」

「おお、これからの、」

という処へ、萌黄裏もえぎの紺看板に二の字を抜いた、切立きつたての半被はつぴ、
 そればかりは威勢が可いいが、かれこれ七十にもなろうという、十と
 筋右衛門すじうえもんが向むこう願はちまき卷まき。

今一人にん、唐縮緬とうちりめんの帯をお太鼓に結んで、人柄な高島田、風呂
 敷包を小脇に抱えて、後前あとさきに寮の方から路地口へ。

捨吉はこれを見て、

「や、爺とっさん、こりや姉さん、」

「ああ、今日はちつとの、内証ないしよに芝居者のお客があつての、実
 は寮の方で一杯と思つて、下拵したごしらえに来てみると、困るじゃあね
 えか、お前めえ。」

「へい、へい成程。」

「お若が例のやんちゃんをはじめての、騒々しいから厭だと謂うわ。じゃあ一晩だけ店の方へ行つていろと謂つたけれど、それをうむという奴かい。また眩暈めまいをされたり、虫でも発おこされちやあ叶かなわねえ。その上お前、ここいらの者に似合わねえ、俳優やくしやというと目の敵かたきにして嫌うから、そこで何だ。客は向へ廻すことにして、部屋の方の手伝に爺やとこのお辻をな、」

「へい、へい、へい、成程、そりやお前めえさん方御苦勞様。」

「はははは、別おしもやしき荘あなごもりに穴じじ籠の爺じじめが、土用干でございますてや。」

「お前さん、今日は。」とお辻というのが愛想の可いい。

藤三郎はそのまま土手の方へ行こうとして、フト研屋とぎやの店を覗の

ぞきこ
込んで、

「よくお精が出るな。」

「いや、」作平と共に四人の方かたを見ていたのが、天窓あたまをひたり、

「お天気で結構でございます。」

「しかし寒いのに。」と藤三郎は懐手で空を仰ぎ、輪形なりにずツとみまわして、

「筑波の方に雲が見えるぜ。」

七

「嘘あねえ。」

と五助はあとでまた額を撫で、

「怠けちやあ不可いけないと謂いわれた日にやあ、これでちつとは文句のある処だけれど、お精が出ますとおつしやられてみると、恐入るの門なりだ。

実際また我ながらお怠け遊ばす、婆ばばあどんの居た内はまだ稼ぐ気もあつたもんだが、もう叶かなわねえ。

人間色気と食気が無くなつちやあ働けねえ、飲のみけで稼ぐという奴やつあ、これが少ねえもんだよ、なあ、お勝さん、」と振向いて呼んでみたが、

「もうお出懸けだ、いや、よく老実まめに廻ることだ。はははは作平さん、まあ、話しなせえ、誰も居ねえ、何ならこつちへ上つて炬こ

燧たつに当つてよ、その障子を開けりや可いい、はらんばいになつて休ゆんで行きねえ。」

「そうもしてはいられぬがの、通りがかりにあれじや、お前さんの話が耳に入いつて、少し附かぬことを聞くようじゃけれど、今のその剃かみそり刀うの失せるといふ日は、確か十九日とかいわした、「むむ、十九日十九日、」と、氣乗きのりがしたように重ね返事、ふと心付いた事あつて、

「そうだ、待ちなせえ、今日は十九日と、」

五助は身を捻ひねつて、心こころ覚おぼえ、後うしろざまに棚なる小箱の上から、取とり下おろした分厚な一綴てつの註文帳。

膝の上で、びたりと二つに割つて開け、ばらばらと小口を返し

て、指の尖さきでずツと一わたり、目金で見通すと、

「そうそうそう、」といつて仰向あおむいて、掌たなそこで帳面をたたくこと二
三度す。

作平もしよぼしよぼとある目で覗のぞきながら、

「日切ひぎれの仕事かい。」

「何、急ぐのじゃあねえけれど、今日中に一挺私ちよわしが気で研いで進
ぜたいのがあったのよ、つい話にかまけて忘りようとしたい、ま
あ、」

「それは邪魔をして気の毒な。」

「飛んでもねえ、緩ゆつくりしてくんねえ。何さ、実はお前めえ、聞いてい
なすったか、その今日だ。この十九日にやあ一日仕事を休むんだ

が、休むについてよ、こう水を更あらためて、砥石としいしを洗つて、ここで一挺ねんいり念入ねんいりというのがあるのさ、」

「気に入つたあつらえかの。」

「むむ、今そこへ行きなすつた、あの二上屋ゆの寮が、」
と向うの路地ゆびさを指した。

「あ、あ、あれだ、紅梅が見えるだろう、あすこにそのお若さん
てつて十八になるのが居て、何だ、旦那の大ひぞうっこの秘蔵女さ。

そりや見せたいような容きりよう色いろだぜ、寮は近頃出来たんで、やつぱり女郎屋の内証ないしよで育つたもんだが、人は氏よりというけれど、作平さん、そうばかりじゃあねえね。

お蔭で命を助かつた位ほどな施こしを受けてるのがいくらもあら。

藤三郎父親ちやんがまた夢中になつて可愛がるだ。

少姐ねえさんの袖すがに縋りや、抱えられてる妓衆こどもしゆうの証文も、その場で煙けむ

になりかねない勢いきおいだけれど、そこが方便、内に居るお勝なんざ、

よく知つてていうけれど、女郎衆なんという者は、ハテ凡人にや

あ分らねえわ。お若さんの容きりよう色が佳いいから天窓あたまを下げるのが口

惜やしいとよ。

私あつしあ鏢びたいちもん一文世話になつたんじやあねえけれど、そんなこんな

でお前めえ、その少姐ねえさんが大の鼻ひいき。

どうだい、こう聞きやお前めえだつて鼻ひいきにしぎあなるめえ。死

んだ田之助そツくりだあな。」

八

「ところで御註文を格別の扱あつかいだ。今日だけは他の剃刀を研がねえからね、仕事と謂いや、内じやあ商売人のものばかりというもんだに因よつて、一番不浄除よけの別火べつびにして、お若さんのを研ごうと思つて。

うっかりしていたが、一挺来きていたというもんだ、いつでもこ
うさ。

一体十九日の紛失一件は、どうも廓くるわにこだわつてるに違ちがえねえ。
崇たたは妓衆こどもしなんだからね、少姐ねえさんなんざ、遊あいらん女にじやあなし、
しかも廓くるわうち内うちに居るんじやあねえから構かまうめえと思つてよ。

まあ何にしる変な訳さ。今に見ねえ、今日もきつと誰方どなたか取り
にござる。いや作平さん、狐千年をふ経れば怪をなす、私がわつし剃刀かみそり
研とぎなんぎ、商売往来にも目立たねえ古物こぶつだからね、こんな場所
がらじゃアあるし、魔がさすと見えます。

そういやあ作平さん、お前さんの鏡かがみ研とぎも時代なものさ、お
互たげえに久しいものだが、どうだ、御無事かね。二階から白井権八の
顔でもうつりませんかい。」

その箱と盥たらいとを荷になつた、瘦やせさらばいたる作平は、蓋けだし江戸市中
よわたりよわたりおもかけ世渡ぐさにおもかけ俵を残した、鏡を研いで活業なりわいとする爺じじいであつた。

淋しげにうなず頷いて、

「ところがもし御同様じゃで、」

「御同様!?」と五助は日脚を見て仕事に懸る気、寮の美人の剃刀を研ぐ気であろう。桶おけの中で砥石といしを洗いながら、慌てたように謂返した。

「御同様は気がねえぜ、お前めえの方にも曰いわくがあるかい。」

「ある段か、お前さん。こういうては何じやけれど、田町の剃刀研わし、私は広徳寺前を右へ寄つて、稲荷町いなりちようの鏡研、自分達が早や変化へんげの類たぐいじや、へへへへへ。」と薄うす笑わらい。

「おやおや、汝てめえから名乗る奴やつもねえもんだ。」と、かつちり、つらつらと石を合せる。

「じやがお前、東京と代が替つて、こちとらはまるで死んだ江戸のお位牌いはいの姿じやわ、羅宇屋らおの方はまだ開あけたのが出来たけれど、

もう狸まみあな穴の狸、梅暮里どじょうの鱒ひとつなどと同じやて。その癖職人ひとつ絵合せの一枚刷ずりにや、烏帽子素袍えぼしすおうを着て出ようというのじや。」

「それだけになお罪が重いわ。」

「まんざらその祟たたりに因縁のないことも無いのじや、時に十九日の。」

「何か剃刀の失うせるに就いてか、」

「つい四五日前、町内の差配人おおやさんが、前の溝川の橋を渡つて、
 蔀しとみおろを下した薄暗い店さきへ、顔を出さしつたわ。はて、店賃たなちんの
 御催促。万年町の縁の下へ引越ひっこすにも、彪むくいぬ犬わたりに渡わたりをつけんこと
 にやあなりませぬ。それが早や出来ませぬ仕誼しぎ、一刻も猶予なら
 ぬ立退たちけでござりましょう。その儀ならば後のちとは申しませぬ、た

つた今川ン中へ引越しますと謂うたらば。

差配さん おおよ 苦 にがわらい 笑 を して、狸爺め、濁酒 どぶろく に喰い酔 くら っつて、千鳥

足で帰つて来たとして、棧橋 さんばし を踏外そうという風かい。溝店 どぶだな の

お祖師様と兄弟分だ、少い わか 内から泥濘 ぬかぬみ へ踏込んだ験 ためし のない己 おれ だ、

と、手前 てめえ 太平楽を並べる癖に。

御意でござります。

どこまで始末 お に了えねえか数 すう が知れねえ。可 い いや、地尻の番太

と手前 てめえ とは、己 おら が芥子坊主 けしぼうず の時分から居てつきの厄介者 あて だ。当も

ねえのに、毎日研物の荷を担いで、廓内をぶらついて、帰りにや

あ箕輪 みのわ の浄閑寺へ廻つて、以前御鼻 ごひいき 貞になりましたと、遊女 おいらん の

無縁の塔婆に挨拶 あいさつ をして来やあがる。そんな奴も差配 さはい 内になく

ツちやあお祭の時幅が利かねえ。^{せがれ}悴は稼いでるし、稲荷町の差配は店賃の取り立てにやあ歩行^{ある}かねえツての、むむ。」と大得意。この時五助はお若の剃刀をびつたりと砥^とにあてたが、哄^{こうぜん}然として、

「氣に入つた氣に入つた、それも鬣^{はげ}の仁左衛門だい。」

作平物語

九

「ところで聞かつしやい、差配おおやさまの謂いうのには、作平、一番念ひとつね入んいりに遣やつてくれ、その代り儲かるぜ、十二分のお手当だと、膨らんだ懐ふところ中から、朱総しゆぶさつき、錦にしきの袋入ふくろいりというのを一面の。何でも差配おおやさんがお出入でいりの、麴こうじ町まち辺の御大家の鏡じやそうな。

さあここじやよ。十九日に因縁いんえんづきは。憚はばかつてお名前は出さぬが、と差配おおやさんが謂いわつしやる。

その御大家は今寡婦ごけさま様じや、まず御後室ごごしむというのかい。ところでその旦那様だんなさまというのはしかるべきお侍、もうその頃は金モオルの軍人いくさじんというのじや。

鹿児島戦争の時に大したお手柄てしんがあつて、馬車ばしやに乗らつしやる

ほどな御身分になんなされたとの。その方が少い時よ。

誰もこの迷ばかりは免れぬわ。やつぱりそれこちとらがお花主の方に深いのが一人出来て、雨の夜、雪の夜もじや。とどの詰りかの、床の山で行倒れ、そのまんまずツと引取られたいより他に、何の望もなくなつたというものかい。居続の朝のことだとの。

遊女は自分が薄着なことも、髪のコわれたのも気がつかずに、しみじみと情人の顔じや。窶れりや窶れるほど、嬉しいような男とこぶり振 じゃが、大層髭が伸びていた。

鏡台の前に坐らせて、嗽茶碗で濡した手を、男の顔へこう懸けながら、背後へ廻つた、とまあ思わつせえ。

遊女は、胸にものがあつてしたことか。わざと八寸の延

のべかが

鏡みが鏡立たてに据えてあつたが、男は映る顔に目も放さず。

うしろから肩越かたこに気高い顔を一所にうつして、遊女おいらんが死のう
という氣じや。

あなた、私の心が見えましよう、と覗のぞきこ込んだ時に、ああ、堪
忍しのしておくんなさい、とその鏡を取つて俯向けうつむにして、男がぴつ
たりと自分の胸へ押着おっつけたと。

何を他人がましい、あなた、と肩につかまつた女の手を、背後うしろ
ざまに弾はねたので、うんにや、愚痴うらみなようだがお前には怨うらみがある。
母おつかさん様さんによく肖にた顔を、ここで見るのは申訳がないといつて、

がつくり俯向うつむいて男おとこ泣なき。

遊女おいらんはこれを聞くと、何と思つたか、それだけのものささえ持

てようかという瘦やせた指で、剃かみそり刀を握にぎつたまま、顔の色をかえて、ぶるぶると震ふるえたそうじやが、突いきなりさかて然逆手に持直して、何と、背後うしろからものもいわずに、男の咽喉のどへ突つっこ込んだ。」

五助は剃刀の平ひらを指さでおさ圧おさえたまま、ひよいと手を留とどめた。

「おお、危あぶえ。」

「それにの、刃物を刺すといや、針さしへ針をさすことより心得ておらぬような婦人おんなじやあなかつた。俺おらあ遊女おいらんの名と坂の名はついぞ覚おぼえたことは無なえツて、差配おおやさんは忘われたと謂いわツしたついけ。その遊女は本名お縫さんと謂いつての、御大身じやあなかつたそうじやが、歴れつきとした旗本のお嬢お嬢さんで、お邸やしきは番町辺。

何でも徳川様が瓦解がの時分に、父おとつさん様の方は上野へえへ入いんなすつ

て、お前、お嬢さんが可哀かわいそうにお邸の前へ莫塵ごごを敷いて、蒔絵まきえの重箱だの、お雛ひな様だの、錦絵にしきえだのを売ってござった、そこへ通りかかって両方で見初めたという悪縁じや。男の方は長州藩の若侍。

それが物変り星移りの、講釈のいいぐさじやあないが、有為轉變、芳原でめぐり合あい、という深い交情なかであつたげな。

牛込見附で、仲ちゆうげん間の乱暴者を一人にん、内職を届けた帰りがけに、もんどりを打たせたという手利てききなお嬢さんじや、廓くるわでも一ひとし時きりあたり四辺を払つたというのが、思い込んで剃刀で突いた奴やつ。」

「ほい。」

「男はまるで油断なり、万に一つも助かる生命いのちじゃあなかつたらうに、御運かの。遊おいらん女は気がせいたか、少し狙ねらいがはずれた処へ、その胸に伏せて、うつむいていなすつた、鏡で、かちりとその、剃刀の刃が留まつたとの。

私わしはどちらがどうとも謂いわぬ。遊おいらん女の鼻ひいき屑くずをするのじゃあな
いけれど、思詰めたほどの事なら、遂げさしてやりたかつたわ、
それだけ心得のある婦人おんなが、仕損じは、まあ、どうじゃ。」

「されば、」

「その代り返す手で、我が咽喉のどを刎はね切つた遊おいらん女の姿の見事さ

!

口惜くやしい、口惜くやしい、可愛こいこの人の顔を余所よその婦人おんなに見せるのは口惜くやしい！ との、唇くちを嚙かんだまま、それなりけり。

全く鏡を見なすつた時に、はツと我に返つて、もう悪所には来まいという、吃きつとした心になつたのじゃげな。

容子ようすで悟おつた遊あいらん女も目が高かつた。男は煩惱の雲晴れて、はじめて拜まむ真しん如にょの月かい。生命いのちの親ちなり智識ちなり、とそのまま頂たかした、鏡がそれじゃ。はて総ふさつき錦の袋入ははその筈はずじゃて、お家いへに取とつては、宝たじやものを。

念ねんを入れて仕上げてくれ、近ちか々にその後室ご様が、実まの児こよりも可愛こがっておいでなさる、甥おいご御ごが一方ひとかた。悪い茶も飲のまずに、さ

めてその甥御様に送る間にあつた、ということ、研賃とぎちんには多
 かるうが、一杯飲んでくれと、こういうのじや。

頂きます頂きます、飲代のみしろになら百両でも御辞退つかまつ仕りまする儀
 ではござりませぬと、さあ飲んだ、飲んだ、昨夜ゆうべ一晚。

ウイか何かでなあ五助さん、考えて見ると成程な、その大家の
 旦那がすっかり改心をなされた、こりや至極じやて。

お連つれあい合あの今の後室が、忘れずに、大事にかけてござらつしや
 る、お心こころ懸がけも天あつぱれ晴はなり、来歴あつぱれづきでお宝物たからものにされた鏡はま
 た錦の袋入。こいつも可いわい。その研手とぎてに私わしをつかまえた差配
 さんも氣に入つたり、研いだ作平もまず可いわ。立派な身分にな
 んなすつた甥御も可よしい。戒いましめのためと謂いうて、遺物いりものにさつしやる趣

向も受けた。手間じやない飲代にせいという文句も可しか、酒も可いが、五助さん。

その発端になつた、旗本のお嬢さん、剃刀で死んだ遊女おいらんの身になつて御覧ごらんじろ、またこのくらいよくない話はあるまい。

迷まよじや、迷は迷まよじやが、自分の可愛い男の顔を、他ほかの婦人おんなに見せるのが厭いやさに、とてもとあきらめた処で、殺して死のうとまで思い詰めた、心はどうじやい。

それを考えれば酒も咽喉のどへは通らぬのを、いやそうでない。魂こ魄んぱくこの土どに留とどまつて、浄閑寺にお参詣まいりをする私わしへの礼心、無縁の信女達の総代に麴町の宝物を稲荷町までお遣わしで、私わしに一杯振舞うてくれる気、と、早や、手前勝手。飲みたいばかりの理窟

をつけて、さて、煽^{あお}るほどに、けるほどに、五助さん、どうだ。
私^{わし}の顔色の悪いのは、お憚^{はばか}りだけれど今日ばかりは貧乏のせい
でない。三年目に一度という二日酔の上機嫌じゃ、ははは。「と
さも快げに見えた。

夕空

十一

時に五助は反故紙^{ほごがみ}を扱^{しご}いて研ぎ澄^{すま}した剃刀^{かみそり}に拭^{ぬぐ}いをかけたが、

持直して掌へ。てのひら

折から夕暮の天そら暗く、筑波から出た雲が、早や屋根の上から大お驚おわしくちばしの嘴のごとく田町の空を差さし覗のぞいて、一しきり烈はげしくなつたゆきき往来の人の姿は、ただ黒い影が行違ゆきちがい、入乱るるばかりになつた。

この際ひととき一際色の濃く、鮮あざやかに見えたのは、屋根越に遠く見ゆる紅梅の花で、二上屋の寮の西向の硝子窓がらすへ、たらたらと流るるごとく、横雲の切目きれめからとばかりの間、夕陽が映じたのである。
 剃刀の刃は手許てもとの暗い中に、青光三寸、颯々さつさつと音をなして、骨をも切るよう皮をすべ辻つつた。

「これだからな、自慢じゃあねえが悪くすると人ごろしの得物に

ならあ。ふむ、それが十九日か。」といつて少し鬱ふさぐ。

「そこで久しぶりじや、私わしもちつと冷える気味でこちらへ無沙汰をしたで、また心ゆかしに廓くるわを一廻まわり、それから例の箕みの輪わへ行つて、どうせ苔こけの下じやあろうけれど、ぶツつかり放題、そのお嬢さんの墓と思つて挨拶をして来ようと、ぶらぶら内を出て来たが、お極きまりでお前まいン許とこへお邪魔をすると、不思議な話じや。あと前さきはよく分らいでも、十九日とばかりで聞く耳が立つたての。

何じや知らぬが、日が違わぬから、こりやものじや。

五助さん、お前まいの許とこにもそういうかかり合あいがあるのなら、悪いことは謂いわぬ、お題目を唱えて進すすませえ。

つい話で遅おそくなった。やつとこさと、今日はもう箕みの輪わへだけ

廻るとしよう。」と謂うだけのことを謂つて、作平は早や腰を延の
 そうとする。

トタンにがらがらと腕車くるまが一台、目の前へ蹶あらかれて、人ひと通とどの
 中を曳ひいて通る時、地響じびきがして土間ぐるみ五助の体たいはぶるぶる
 と胴震どうふるい。

「ほう、」といつて、俯向うつむいていたぼんやりの顔を上げると、目
 金をはずして、

「作平さん、お前は怨うらみだぜ、そうでなくツてさえ、今日はお極きまり
 のお客様が無けりや可いいが、と朝あから父親おやじの精進日ぐらいな気が
 しているから、有あり体ていの処腹うちの中じやお題目だ。

唱なえて進しんぜなせえは聞きえたけれど、お前めえ、言い種ぐさに事ことを欠かいて、

私が許わしとこをかかり合あいは、大おおきに打てらあ。いや、もうてつきり疑いなし、毛頭違ちがいなし、お旗本のお嬢さん、どうして堪たまるものか。話のようじゃあ念が残らねえでよ、七代までは崇たたります、むむ崇るとも。

串じょうだん 戯し じやあねえ、どの道何か怨うらみのある遊おいらん女の幽霊とは思

つたけれど、何どこ樓の何つかまだか捕えどこのねえ内はまだしも気休め。そう日が合つて剃刀があつて、当りがついちやあ叶かなわねえ。

そうしてお前めえ、咽喉のどを突いたんだつていつたじやあねえか。「これから、これへ、」と作平は垢あかじみた細い皺しわだらけの咽喉のどぼと仏けを露むきだ出して、握にぎりこぶし 拳こぶしで仕方を見せる。

五助も我知らず、ばくりと口を開あいて、

「ああ、ああ、さぞ、血が出たろうな、血が、」

「そりや出たろうとも、たらたらたら、」と胸へ真直まっすぐに棒を引く。

「うう、そして真赤まっかか。」

「黒味がちじや、鮪まぐろの腸わたのようなのが、たらたらたら。」

「止よしねえ、何なだなお前めえ、それから口惜くやしいッて齒かを嚙かんで、」

「怨うらみ死じじやの。こう髪かみを啣くわえての、凄すごいような美しい遊あそ女にょ

じやとの、恐こわいほど品の好いいのが、それが、お前めえこう。」と口を歪ゆがめる。

「おお、おお、苦くるしいから白魚しらおのような手を掴つかみ、足をぶるぶる

。」と五助は自分で身悶みもだえして、

「そしてお前^{めえ}、死骸^{しがい}を見たのか。」

「何を謂わつしやる、私^{わし}は話を聞いただけじや。遊女^{おいらん}の名も知

りはせぬが。」

五助は目を睜^{みは}つてホツと呼吸^{いき}、

「何の事だ、まあ、おどかしなさんない。」

十二

作平も苦笑い、

「だつてお前が、おかしくもない、血が赤いかの、指をぶるぶるだの、と謂うからじや。」

「目に見えるようだ。」

「私わしもやっぱり。」

「見えるか、ええ？」

「まずの。」

「何もそう幽霊に親類があるように落着いていてくれるこたあねえ、これが同一おなじでも、おばさんに雪責にされて死んだとでもいう脆弱かよわい遊あそび女のおいらんなら、五助も男だ。こうまでは驚かねえが、旗本のお嬢さんで、手が利いて、中ちゆうげん間まを一人もんどり打たせたと聞いちゃあ身動きがならねえ。

作平さん、こうなりやお前めえが対手あいてだ、放しツこはねえぜ。

一升買うから、後生だからお前今夜は泊り込こみで、炬燵こたつで附合つつ

てくんねえ。一体ならお勝さんが休もうという日なんだけれど、限つて出てしまったのも容易でねえ。

そうかといつて、宿場で厄介になろうという年とし紀じやあなし、

無茶に廓くるわへ入るかい、かえつて敵に生いけど捉られるも同然だ。夜が更

けてみな、油に燈心だから堪たまるめえじゃねえか、恐しい。名みょうだ

代い、部屋の天井から忽こつねん然として剃刀が天あまくだ降ります、生命いのちにか

かわるからの。よ、隣のは筋が可いいぜ、はんぺんの煮込を御厄介

になつて、別に厚切な鮪まぐろを取つておかあ、船頭、馬うまかた士だ、お前

とまた昔話でもはじめるから、」と目金に恥しよじずしよ惜しよげたりけり。

作平が悦えつ喜きなめ斜なめならず、嬉うれ涙しなみだより真まっ先さきに水鼻を啜すすつて、

「話せるな、酒と聞いては足腰が立たぬけれども、このまみこまお興し

を据えては例のお花主とくいに相済まぬて。」

「それを言うなというに。無縁塚をお花主とくいだなぞと、とかく魔の物を知ちかづき己にするから悪いや、で、どうする。」

「もう遅いから廓廻まわりは見合せて直ぐに箕の輪へ行つて来ます。」

「むむ、それもそうさの。私も信心わつしをすみが、お前めえもよく拝んで

御免蒙こうむつて来ねえ。廓どころか、浄閑寺の方も一はしり走が可いいぜ。と

ても独ひとりじや遣切やりきれねえ、荷物は確たしかに預かつたい。」

「何か私わしも旨うめえ乾物ひものなど見付けて提たげて来よう、待つていさつせ

え。」と作平はてくてく出かけて、

「こんなに人ひと通とがあるじやないかい。」

「うんや、ここいらを歩行あるくのに怨おんり霊ようを得脱とくだつさせそうな頼た

母のもしい道徳は一人も居ねえ。それに一しきり一しきりひツそりすらあ、またその時の寂しさというものは、まるで時雨が留やむようだ。」

作平は空を仰いで、

「すっかり曇って暗くなつたが、この陽気はずれの寒さでは、」

五助あわただ慌しく。

「白いものか、禁物々々。」

点灯頃

「はい、はい、はい、誰方どなただい。」

作平のよぼけた後姿を見失った五助は、目の行くゆくさきも薄暗いが、さて見廻すと居いまわり廻はなおのことで、もう点灯ひともしごろ頃。

物の色は分るが、思いなしか陰気ひきこでならず、いつもより疾はやく洋燈ランプをとと思う処へ、大音寺前の方から盛さかんに曳ひきこ込んで来る乗込客、今度は五六台、引続いて三台、四台、しばらくは引きも切らず、がツがツ、轟ごうごう々という音に、地鳴じなりを交まじえて、慣れたことながら腹にこたえ、大儀けはいそうに、と眺めていたが、やがて途絶けはいえると裏口に氣勢けはいがあつた。

五助はわざと大声で、

「お勝さんかね、……何だ、隣か、」と投げけるように呟いたが、

「あれ、お上んなせえ、構わずいいと入るべし、誰方だね。」

耳を澄して、

「畜生、この間もあの術で驚かしやあがった、彪犬め、しかも

真夜中だろうじやあねえか、トントントンさ、誰方だと聞きやあ

黙然で、蒲団を引被るとトントンだ、誰方だね、黙りか、ま

たトンか、びツくりか、トンと来るか。とうとう戸外から廻つて

お隣で御迷惑。どのくらいか臆病づらを下げて、極の悪い思

をしたか知れやしねえ、畜生め、己が臆病だと思いやあがつて、

と中ツ腹でずいと立つと、不意に膝かけの口が足へからんだので、

かめ
の子這。

じただらを踏むばかりに蹴はづして、一段膝をついて躪り上るにじあがと、件くだんの障子を密そつと開けたが、早や次の間は真暗まつくらがり。足をずらしてつかつかと出ても、馴なれて畳やぶれの破つつにも突かからず、台所は横づけで、長火鉢の前から手を伸のばすとそのまま取れる柄杓ひしゃくだから、並々と一杯、突いきなり然あたま天窓から打ぶつかぶせる気、お勝がそんな家業でも、さすがに婦人おんな、びつたりしめて行つた水口の戸を、がらりと開けて、

「畜生！」といったが拍子抜け、犬も何にも居ないのであつた。首を出してみまわすと、がさともせぬ裏の塵塚ちりづか、そこへ潜つて遁にげたのでもない。彼方あなたは黒堀がひしひしと、遙はるかに一並ならび、一ツ折

れてまた一並、三階の部屋々々、棟の数は多いけれど、まだいずくにも灯が入らず、森しんとして三味線さみせんの音ねもしない。ただ遙くうに空を衝ついて、雲のその夜よは真ま黒くろな中に、暗緑色の燈ともの陰慘しびたる光を放つて、大屋根に一眼一角の鬼つたの突立つたつたようなのは、二上屋の常燈である。

五助は半身水口から突出して立っていたが、頻しきりうしろに後見うしろらるるよ
うな気がして堪たまらず、柄杓たまたをびっしやり。

「ちよツ、」と舌打、振返つて、暗くがりを透すかすと、明けたままの障子の中から仕切つたように戸外おもての人どおり。

やがて旧もとの仕事場の座に返つて、フト心着いてはツと思つた。

「おや、変だぜ。」

五助は片膝立て、中腰になり、四ツに這はいなどして搔探かいさぐり、膝かけをふるつて見て、きよときよとしながら、

「はてな、先刻さつきあだに困つてと、手に持ったまま、待てよ、作平は行つたと、はてな。」

正に今日の日をもつて、先刻研上げた、紅梅屋敷、すなわち察むすめの女お若かみそりの剃刀を、どこへか置忘れてしまったのであつた。

「懐ふところ中へは入れず、」といいいながら、慌てて懐中へ入れた手を、それなり胸に置いて、顔の色を変えたのである。

しばらくして、

「まさか棚へ、」と思わず声を放つて、フト顔を上げると、一枚あけた障子の際なる敷居の処すそを裾すそにして、扱帯しじきの上あたりで褌つまを

取つて、鼠地に雪ぢらしの模様のある部屋着姿、眉の鮮あざやかな鼻筋の通つた、真まっしろ白な頬びんに鬢びんの毛の乱れたのまで、判はつきり然と見えて、脊せきがすらりとして、結上げた髪かみが鴨居かもいにも支つかえそうなのが、じつと此方こなたを見詰めていたので、五助は小さくなつて氷りついた。

「五助さん、」と得も言われぬやや太い声して、左の手で襟をあけると、褌ふんどしを持っていた手を、ふらふらとある袖口そでぐちに入れた時、裾すそがはらりと落ちて、脊せきが二三寸伸びたと思うと、肉ししつき豊かなぬくもりもまだありそうな、乳房ちちも見える懐なごみから、まともに五助に向けた蒼あおざめた掌てのひらに、毒蛇うろこの鱗うろこの輝きらくような一挺ちようの剃刀ちしやうを挟んでいて、

「これでしよう、」

五助はがツと耳が鳴た、頭に響く声も幽に、山あり川あり野の末に、糸より細く聞ゆるごとく、

「不浄除けの別火だとき、ほほほほほ、」

わずかに解いた唇に、艶々と鉄漿を含んでいる、幻はかえつて目前。

「わッ」というと真俯向、五助は人心地あることか。

「横町に一ツずつある芝の海さ、見や、長屋の中を突通しに廓が見えるぜ。」

とこの際戸外を暢気なもの。

「や！ 雪だ、雪だ。」と呼わつたが、どやどやとして、学生あり、大へべれけ、雪の進軍氷を踏んで、と哄とばかりになだれて

通る。

雪の門

十四

宵にいつたん一旦ちらちらと降つたのは、垣の結目ゆいめ、板戸の端ひさし、
 往来ゆきぎの人の頬、鬢びんの毛、帽子の鰐つばなどに、さらさらと音ずれたが、
 やがて声はせず、さるものの降るとも見えないで、木の梢こしずえも、屋
 の棟も、敷石も、溝板も、何よりはじまるともなしに白くなって、

煙草屋たばこの店ともしの灯び、おでんあんどうの行燈、車夫かんばんの提灯、いやしくもあかりのあるものに、一しきり一しきり、綿わたのちぎれが群むらつて、真まつしろ
 白な灯取虫ひとりむしがばたばた羽をあてる風情であつた。

やがて、初夜すぐるまでは、縦横に乱れ合つた足駄駒下駄こまげたの痕あとも、次第に二ツとなり、三ツとなり、わずかに凹くぼを残すのみ、車の轍わだちも遙々はるばると長き一条の名残なごりとなつた。

おうおうと遠近おちこちに呼交よびかわす人声も早や聞えず、辻たたずに彳たんで半身に雪を被かぶりながら、揺り落すごとに上衣のひだの黒く顕あられた巡査とぎやの姿、研屋とぎやの店から八九間さきなる軒下ひっこに引込んで、三島神社とおりの辺あたりから大音寺前とおりの通、田町にかけてただ一白。

折さつから颯と渡つた風は、はじめ最も低く地上をすつて、雪の上う

わづら
面を撫でてあたかも篩ふるいをかけたよう、一様に平たいらにならして、人
の歩行あるいた路ともなく、夜の色さえ埋うづみ消したが、見る見る垣を
互わたり、軒を吹き、廂かすを掠め、梢を鳴らし、一陣たちまち虚あそぞら蒼に
拡がって、ざつという音はげ烈しく、丸雪は小雪を誘って、八方十面
降り乱れて、静しずしず々と落ちて来た。

紅梅の咲く頃なれば、かくまでの雪の状さまも、旭あさひとともに霜より
果敢はかなく消えるのであろうけれど、丑うしみつ満頃みよこおいは都みやこのしかも如き
月さらぎの末にあるべき現象とも覚えぬまでなり。何物かこれ、この
大都會を襲つて、紛々がいがい皚々あいらわの陣を敷くとあやまたるる。

さればこそ、高く竜燈あらかわの露あらかわれたよう二上屋の棟あおに蒼き光の流る
るあたり、よし原の電燈かすかの幽こに映ずる空を籠めて、きれぎれに冴さ

ゆる三絃の糸につれて、たかわらい高笑をかしまをする女の声の、倒さかしまに田町へ崩
 るるのも、あたかもこの土の色の変つた機に乗じて、空くうを行く外げ
 道どう変化へんげの囁ささやきかと物もの凄すごい。

十二時疾とくに過ぎて、一時前後、雪も風も最も烈しい頃であつ
 た。

吹雪の下に沈める声して、お若が寮なる紅梅かどしずかの門かどを静おとずに音信おとずれ
 た者がある。

トン、トン、トン、トン。

「はい、今開けます、唯ただいま今、々々、」と内では、うつらうつら
 とでもしていたらしい、眠まじけ交りのやや周章あわてた声して、上あがりが
 框まちから手を伸のばした様子で、掛金をがツちり。

その時戸外おもてに立ったのが、

「お待ちなさい、貴方あなたはお宅うちの方なんですか。」と、ものありげに言ったのであるが、何の気もつかない風で、

「はい、あの、杉でございます。」と、あたかもその眠っていたのを、詫わびるがごとき口吻くちぶりである。

その間まになお声をかけて、

「宜いいんですか、開けても、夜がふけております。」

「へい、……、」ちと変いつた言いぐさをこの時はじめて気にしたらしく、杉というのは、そのままじつとして手を控えた。

小留おやみのない雪は、軒の下ともいわず浴びせかけて降ふりしければ、

男の姿はありとも見えずに、風はますます吹きすさぶ。

十五

「杉、爺じいやかい。」とこの時に奥かたの方から、風こそ荒すさべ、雪の夜よは天地を沈しずめて静しずかに更ゆけ行く、畳にはらはらと媚なまめく登あし音。

端はし近ぢかになつたがいと少わかく清すずしき声で、

「辻が帰つておいでかい。」

「あれ、」と低こゝえ声こゝえに年増としまが制して、門かどなる方かたを憚はばかかけけ勢はい。

「可よかつたら開けて下さい、こつちにお知ちか己づきの者じやあないんです、」

「……………」

「この突つきあたり当うちの家で聞いて来たんですが、紅梅屋敷とかいうのでしよう。」

「はい、あの誰どなた方様で、」

「いえ、御存じの者じゃありませんが、すこし頼まれて来たんです、構かまいません、ここで言いますから、あのね。」

「お開けよ。」

「……………」

「こつちへさあ。可いいわ、」

ここにおいて、

「まあ、お入りなさいまし。」と半ばおき圧おえていた格子戸をがらりと開けた。框かまちにさし置いた洋燈ランプの光は、ほのぼのと一筋、戸口か

ら雪の中。

同時に身を開いて一足あとへ、体を斜めにするがいつう外套きを被た人の姿を映して、余あまりあかりの明ゆんでは、左手くれないらほみてらなる前庭を仕切った袖垣を白く描き、枝ましを交えた紅梅にうつつて、間近なるはその紅の苔を照した。けれども、その最もよく明かに且つ美しく照したのは、雪の風情でなく、花の色でなく、お杉がさした本斑布ほんばらふの櫛くしでもない。濃いお納戸地やなぎたてわくに柳立こもんちりめん枿の、小紋縮緬こもんちりめんの羽織をを着て、下着は知らず、黒くろじゆす縹す子の襟しをかけた縞縮緬しまの着物という、寮のお若が派手姿と、障子に片手をかけながら、身をそむけて立った脇あけをこぼるじゆばん襦ばん袢と、指ゆびわに輝く指環とであった。

部屋ぼたらき働のお杉は円まるまげ髻かしらの頭をを下げ、

「どうぞ、あなた貴下、」

「それでは、」と身を進めて、さすがに堪え難うしてか、飛込む勢いきおはかおれ。中折の帽子を目深まぶかに、洋服の上へ着込んだ外套の色の、黒いがちらちらとするばかり、しつくい叩きの土間も、研出とぎだしたような沓脱石くつぬぎいしも、一面に雪紛々。

「大変でございますこと、」とお杉が思わず、さもいたわるように言ったのを聞くと、吻ほっとする呼吸いききをついて、

「ああ、乱暴だ。失礼。」と身震みふるいして、とんとんと軽く靴を踏み、中折を取ると柔かに乱れかかる額髪を払って、色の白い耳のあたりを拭ぬぐったが、年とし紀のころ二十三四、眉あざやの鮮かな目附あきらに品のある美少年。殊にもものいいの判然はつきりとして訛なまりのないのは明あきらにその

品性を語り得た。お杉は一目見ると、直ちにかねて信心の成田様の御おんひだり左、矜羯羅童子こんがらどうじを夢枕に見るような心になり、

「さぞまあ、ねえ、どうもまあ、」とばかり見惚みとれていたのが、慌あわただしく心付いて、庭下駄ひつを引かけると客の背後うしろへ入交いれかわつて、吹雪かど込む門ふたえの戸を二重ながら手早くさした。

「直ぐにお暇いとまを。」

「それでも吹込みまして大変でございますもの。」

と見るとお若さつきが、手を障子にかけて先刻さつきから立ったままぼんやり身動みうごきもしないでいる。

「お若さん、御挨拶をなさいましなね、」

お若は莞爾にっこりして何にも言わず、突いきなり然手つかを支えて、ぱツたり

悄しおれ伏すがごとく坐つたが、透通みみもとるような耳許さつくに颯さつと紅くれない。

鬚の根がゆらゆらと、身を揉もむばかりさも他愛あなさそうに笑つたと思つと、フイと立つてばたばたと見えなくなつた。

客は手持てもち無沙汰ぶさた、お杉も為せん術すべを心得こころず。とばかりありて、次の室まの襖ふすま越こしに、勿体すまらしい澄すましたもののいい。

「杉や、長火鉢の処ところじゃあ失礼しつれいかい。」

十六

「いいえ、貴あなた下失礼しつれいでございますが、別にお座敷へ伺まをいたしますと、寒さむうございますから。そしてこれをお羽織はねおりんなさいまし、気

味が悪いことはございません、仕立したてましたばかりでございます。」
 と裏返しうらがししか、新調しんてうか、知らず筋糸すぢいとのついたままなる、結城ゆうぎの棒ぼうじ
 縞まの寝ねんね子こ半纏はんてん。被きせられるのを、
 「何、そんな、」とかえつて剪賊おいはぎに出逢いつたように、肩かたを捻ねじる
 ほどなおすべりの可いい花色裏はないろうら。雪まぶれの外套がいとうを脱ぬいだ寒さむそううで
 傷いた々いたしい、背うしろから苦くもなくすらりと被かぶせたので、洋服やうふくの上うへにこ
 の広袖ひろそでらで、長火鉢ながひやくの前に胡坐あぐらしたが、大黒屋惣おほくろく六むつに肖にひて否ひなる
 もの、S. DAIKOKUYA とらう風情ふうせいである。

「どうしてこんな晩ばんに、遊あそ女にょがお帰かえしなすつたんですねえ、酷ひど
 いッたらないじゃありませんか、ねえお若わかさん。あら、どうも
 飛とんでもない、火かをお吹ふきなすつちやあ不可いけません、飛とんでもない。」

と什麼そもさんこうすりや何とまあ？ 花の唇がたちまち變じて、鳥くちばしの嘴くちばしにでも化けるような、部屋働の驚き方。お若は美しい眉ひそを顰ひそめて、澄すまして、雪のような頬を火鉢のふちに押おしつけながら、

「消炭を取っておいで、」

「唯ただいま今何します、どうも、貴下御免なさいませよ。主人が留守だもんですから、少姐ねえさんのお部屋でついお心易こころやすだて立たにお炬燵こたを拝借して、続物を読んで頂いておりました処が、」

「つい眠くなつたじゃあないか、」とお若は莞爾にっこりする。

「それでも今夜のように、ふらふら睡氣ねむけのさすつたらないのでございますもの。」

「お極きまりだわ。」

「可哀相かわいそうに、いいえ、それでも、全く、貴下が戸をお叩き遊あそばしたのは、現うつでございましたの。」

「私もうとうとしていたから、どんなにお待ちなすつたか知れないねえ。ほんとうに貴下、こんな晩に帰しますような処へは、もういらつしやらない方が可ようございますわ。構やしません、そんな遊あそ女いらんは一晩の内に凍砂糖こおりざとうになつてしまいます。」と真顔でさも思おもい入いつたように言いつた。お若はこの人を廓くわなる母屋の客と思おも込んだものであろう。

「私は、そんな処へ行つたんじやあないんです。」

「お隠し遊あそばすだけ罪が深こうございますわ、」

「別に隠かくしなんぞするものか。」

しかし飛んだ御厄介になりました、見ず知らずの者が夜中に起して、何だか気が咎めたから入りにくくツていたんだけれど、深切にいつておくんなさるから、白状すりや渡わたりに舟なんで、どうも凍えそうで堪たまらなかつた。」

と語るに、ものもいにくそうな初心ふうせいな風采、お杉はさらぬだに信心な処、しみじみと本尊の顔みまもを瞻りながら、

「そう言えばお顔の色も悪いようでございます、あのちようど取つたのがございますから、熱くお澗かんをつけましようか。」

「召めしあがるかしら、」とお若は部屋ばたらきを顧みて、これはかえつてその下戸であることを知り得たるがごとき口ぶりである。

「どうして、酒と聞くと身みぶるい震いがするんだ、どうも、」

と言いなながら顔を上げて、座右のお杉と、彼方かなたに目の覚めるよ
うなお若の姿とを屹きつと見ながら、明あかるい洋燈ランプと、今青い炎ひを上げた
炭とを、嬉しそうに打眺めて、またほツといきをつけて、
「私を変だと思うでしょう。」

十七

「自分でも何だか夢を見てるようだ。いいえ薬にも及ばない、も
う可いいんです。何だね、ここは二上屋という吉原の寮で、お前さ
んは、女中、ああ、そうして姉さんはお若さん？」

「はい、さようでございます。」とお若はあでやかに打微笑うちほほえむ。

「ええと、ここを出て突当りに家うちがありますね、そこを通つて左へ行くゆと、こう坂になつていましようか、そう、そこから直じきに大門ですか、そう、じゃあ分つた、姉さん、」とお若の方に向直つた。

「姉さんに届けるものがあるんです、」といいながらお杉に向い、「確か廓くるわへ入ろうという土手の手前に、こつちから行くゆと坂が一ツ。」

打うち領なず けば領なずいて、

「もう分つた、そこです、その坂を上ろうとして、雪にがつくり、腕車くるまが支えたのでやつと目が覚めたんだ。」

この日 脇屋わさや欽之助きんのすけが独逸ドイツ行ゆきを送る宴会があつた。

「実は今日友達と大勢で伊予紋に会があつたんです、私がちつと遠方へ出懸けるために出来た会だつたもんだから、方々の杯の目的あてにされたんで、大変に酔つちまつてね。横になつて寝てでもいたろうか、帰りがけにどこで腕車に乗つたんだか、まるで夢中。

もつとも待たしておくはずの腕車はあつただけけれども、一体内は四ツ谷よやの方、あれから下谷したやへ駆けて来た途中、お茶の水から外神田へ曲ろうという、角の時計台の見える処で、鉄道馬車の線路を横に切れようとする発奮はずみに、荷車へ突当つて、片一方の輪をこわしてしまつて、投出されさ。」

「まあ、お危うございます、」

「ちつと擦剥すりむいた位、怪我けがも何もしないけれども。」

それだもんだから、辻車に飛乗とびのりをして、ふらふら眠りながら来たものと見えます。

お話のその土手へ上あがろうという坂だ。しっくり支つかえたから、はじめに気がついてね、見ると驚いたろうじゃあないか。いつの間にか四辺あたりは真白まっしろだし、まるで野原。右手の方の空にやあ半月のように雪空を劃くぎって電燈が映ってるし、今度行ゆこうという、その遠方の都の冬の処を、夢にでも見ているのじゃあるまいかと思つた。

それで、御本人はまさしく日本の腕車くるまに乗ってさ、笑つちやあ不可いけない車夫が日本人だろうじゃあないか。雪の積つた泥除どろよけをおさえて、どこだ、若い衆、どこだ、ここはツて、聞くと、御串ごじょう

戯だんもんだ、と言うんです。

四ツ谷へ帰るんだツてね、少し焦じれ込むと、まあ宜ようがすすき、お聞きよ。

馬鹿にしちや可いかん、と言つて、間まちが違いの原因もとを尋ねたら、何も朋友ともだちが引張ひっぱつて来たという訳じやあなかつた。腕車に乗つた時は私一人雪の降る中をよろけて来たから、ちようど伊藤松坂屋の前の処で、旦那召しまし、と言つたら、ああ遣やつてくれ、といつて乗つたそうだ。

遣つてくれと言うから、廓なへ曳ひいて来たのに不思議はありますまいと澄すましたもんです。議論ぎろんをしたつておツつかない。吹雪じやアあるし、何でも可いから宅うちまで曳ひいてツておくれ、お礼はする

からと、私も困つてね。

頼むようにしたけれど、ここまで参つたのさえ大汗なんで、とても坂を上つて四ツ谷くんだりまでこの雪に行かれるもんじゃあない。

箱根八里は馬でも越すがと、茶にしていやがる。それに今夜ちつと河岸の方とかで泊り込こみという寸法があります、何ならおつき合なさいましと、傍若無人、じれツたくなつたから、突いきなり然靴だから飛び下りたさ。」

二人使者

十八

欽之助は茶一碗、かたちみず靈水ののごとくぐつと干して、

「お恥かしいわけだけれど、実は上野の方へ出る方角さえ分らない。芳原はそこに見えるというのに、車一台なし、人ツ子も通らない。聞くものはなし、一体何時頃か知らんと、時計を出そうとすると、おかしい、す掏られたのか、落したのか、鎖ぐるみなくなっている。時間さえ分らなくなつて、しばらくあの坂の下り口にぼんやりして立っていた。

心細いツたらないのだもの、おまけに目もあてられない吹雪と

来て、酔覚えいざめじやあり、寒さは寒し、四ツ谷までは百里ばかりもあるように思ったねえ。そうすると何だかまた夢のような心持になつてき。生れてはじめて迷児まいごになつたんだから、こりや自分の身体からだはどうかいうわけで、こんなことになつたのじやあなかるうかと、馬鹿々々しいけれども、恐こわくなつたんです。

ただ車くるま夫まやに間違えられたばかりなら、雪だつても今帷子かたびらを着る時分じやあなし、ちつとも不思議なことは無いんだけども。気になるのは、昼間腕車くるまが壊れていましょう、それに、伊予紋で座きまが定つて、杯やりとりの遣取が二ツ三ツ、私は五酌上戸だからもうふらついて来た時分、女中が耳打をして、玄関までちよつとお顔を、是非お目にかかりたい、という方があるツてね。つまり呼出

したものがああるんだ。

灯あかりがついた時分、玄関はまだ暗かつた、宅で用でも出来たのかと、何心なく女中について、中庭あゆみの歩を越して玄関へ出て見ると、叔母の宅うちに世話になつて、従妹いとこの書物ほんなんか教えている婦人が来て立っていました。

先刻さつき奥さんが、という、叔母のことです。四ツ谷のお宅へいらつしやると、もうお出かけになりましたあとだそうですね。お約束あなのものが昨日きのう出来上つて参りましたものですから、それを貴下あなたにお贈り申したいとおっしゃつて、お持ちなすつたのでございますが、お留守だといふのでそのまま持つてお帰りなすつて、あの児このことだから、大丈夫だろうとは思うけれど、そうでもない、お

朋ともだち達におつき合で、他ほかならば可いが、芳原へでも行ゆくと危いい。
お出かけさきへ行つてお渡し申せ、とこれを私にお預けなさいま
したから、腕車で大急ぎで参りました。

何でも広徳寺前あたりに居る、名人の研屋とぎやが研ぎましたそうでござ
いますからツてね、紫の袱紗ふくさづつみ包から、錦にしきの袋に入った、八寸の
鏡を出して、何と料理屋の玄関で渡すだろうじやありませんか。」
と少年は一呼いき吸ついた。お若と女中は、耳も放さず目も放さず。
「鏡の来歴は叔母が口癖のように話すから知っています。何でも
叔父がこの廓くるわで道楽をして、命にも障る処を、そのお庇かげで人らし
くなつたツてね。

私も決して良い処とは思わないけれども、大抵様子は分つてる

が、叔母さんと来た日にやあ、若い者が芳原へ入れば、そこで生いのち命がなくなるとばかり信じてるんだ。

その人に甘やかされて、子のようにして可愛がられて育った私だから、失礼だが、様子は知っていても廓は恐しい処とばかり思ってるし、叔母の氣象も知ってるんだけれども、どうです、いやしくも飲もうと行って、少わかい豪傑が手てばなし放で揃ってる、しかも艶えんなのが、まわりをちらちらする処で、御意見の鏡とは何事だ。

そうして懐へ入れて持つて帰れと来た日にやあ、私は人ひと魂たまを押おつけられたように気が滅め入いった。

しかもお使番が女教師の、おまけに大の基キリストき督きょう教きょう信者と来ては助からんねえ。」

うちほほえ
打微笑み、

「相済まんがどうぞ宅うちの方へお届けを、といつて平にあやまると、使つかいの婦人が、私も主義は違っております。かようなものは信じませんが、貴君あなたを心しんから思召していらつしやる方の志は通すもんです。私もその御深切を感じて、喜んで参りました位です、こういうお使は生れてからはじめてです、と謂いつた。こりや誰だつて、全くそう。」

十九

「しかし土手下で雪に道を遮られて帰る途みちさえ分らなくなつた時

思出して、ああ、あれを頂いて持っていたら、こんな出来事が無かったのかも知れない。考えて見ればいくら叔母だって、わざわざ伊予紋まで鏡もたを持して寄越よこすつてことは容易でない。それを持して寄越したのも何かの前兆、私が受取らないで女の先生を帰したのも、腕車くるまの破れたのも、車夫に間違えられたのも、来よう筈はずのない、芳原近くへ来る約束になっていたのかも知れないと、くだらないことだが、悚ぞっとしたんだね。

もつとも、その時だって、天窗あたまからけなして受けなかったのじやあない、懐へでも入れば受取ったんだけれども、」

我が胸のあたりをさしのぞくがごとくにして、

「こんな扮装いでたちだから困ったろうじやありませんか。

叔母には受取つたということに繕つて、密そつと貴女あなたから四ツ谷の方へ届けておいて下さいつて、頼んだもんだから、少わかい夜会結やかいむすびのその先生は、不心服なようだツけ、それでは、腕車で直ぐ、お宅の方へ、と謂つて帰つちまつたんですよ。

あとは大飲おおのみ。

何しろ土手下で目が覚めたという始末なんですから。

それからね。

何でも来た方へさえ引返ひっかえせば芳原へ入るだけの憂慮きづかいは無いと思つて、とぼとぼ遣やつて来ると向い風で。

右手に大溝おおとぶがあつて、雪を被かついで小家こいえが並んで、そして三階づくり造の大建物の裏と見えて、ぼんやり明あかりのついてるのが見えてね、

刎橋はねばしが幾つも幾つも、まるで卯の花う緘おどしのよろいの袖を、こう、」

借着はんでんの半纏たもとの袂たもとを引いて。

「裏返したように溝どぶを前にして家の屋根より高く引上げてあつたんだ。」

それも物珍しいから、むやむやの胸の中にも、傍見わきみがてら、二ツ三ツ四ツ五足に一ツくらいを数えながら、靴も沈むばかり積つた路を、一足々々踏分けて、欽之助が田町の方へ向つて来ると、鉄漿溝おはぐろどぶが折曲たぢきつて、切れようという処に、一ツだけ、その溝の色を白く裁切たぢきつて刎橋はねばしの架かつたままのがあつた。

「その処おんなに婦人にんが一人立たつてました、や、路を聞きこう、声を懸かけようと思おもう時、

近づく人に白鷺しらさぎの驚き立つよう。

前途ゆくてへすたすたと歩行あるき出したので、何だか気がさしてこつち

でも立停たちどまると、劇はげしく雪の降り来る中へ、その姿が隠れたが、

見ると刎橋ひっかえの際へ引返して来て、またするすると向うへ走る。

続いて歩行あるき出すと、向直つてこつちへ歸つて来るから、私も

また立停るといふ工合、それが三度目には擦違おんなつて、婦人おんなは刎橋

の処で。

私は歩行あるき越して入違いに、今度は振返つて見るようになった

んだ。

そうするとその婦人おんながこうたたずんだきり、うつむいて、さも思案

に暮れたという風、しよんぼりとして哀あわれさつたらなかつたから。

私は二足ばかり引返ひっかえした。

何か一人では仕兼ねるようなことがあるのであろう、そんな時には差支えのない人に、力になって欲しかろう。自分を見て遁にげないものなら、どんな秘密を持っていようと、声をかけて、構うまいと思つてね。

実は何、こつちだつて味方が欲ほしい。またどんな都合で腕車の相談が出来ないものでも無いとも考えたから。

お前さんどうしたんですツて。」

「まあ、御深切に、」と、話に聞惚ききとれたお若は、不意に口へ出した、心の声。

「傍そばへ寄つて見ると、案の定、跣足はだしで居る、実に乱次しどけない風で、

ながじゆばん
長襦袢に扱帯をしめたツきり、鼠色の上着を合せて、兵庫とい
う髪が判はつきり然見えた、それもばさばさして今寢床から出たとい
姿だから、私は知らないけれども疑う処はない、勤つとめにん人だ。
脊の高いね、恐しいほど品の好い遊女おいらんだったツけ。」

二十

「その婦人おんなに頼まれたんです。姉さん、」と謂いかけて、美しい
顔をまともきつむすめに屹と女に向けた。

お若は晴々しそうに、ちよいと背けて、大呼吸おおいきをつきながら、
黙つて聞いているお杉と目を合せたのである。

「誰？」

「へい。」と、ただまじまじする。

「姉さんに、その遊おいらん女が今夜中にお届け申す約束のものがあるが、寮にいらつしやるお若さん、同一御主人おなじだけでも、旦那と
かには謂われぬこと、朋友ともだちにも知れてはならず、新造しんぞなどにさ
とられては大変なので、昼から間まを見て、と思つても、つい人目
があつて出られなかつた。

ちようど今夜は、内証ないしよに大一座の客があつて、雪はふる、部屋々々でも寐ね込こんだのを機しおにぬけて出て、ここまでは来ましたが、土を踏むのにさえ遠退とおのいた、足がすくんで震える上に、今時こう
いう処へ出られる身分の者ではないから、どんな目に逢おうも知

れない。

寮はもうそこに見えます。一町とは間のない処、紅梅屋敷といえは直じきに知れますが、あれ、あんなに犬が吠ほえて、どうすることもならないから、生命いのちを助けると思つて、これを届けて下さいつて、拝むようにして言つたんだ。成程今考えるとここいらで大層犬が吠えたつけ。

何、頼まれる方では造作のないこと、本人に取つては何かしら、様子の分らぬ廓くるわのこと、一大事でもあるようだから、直じかにことづかつた品物があるんです。

ただ渡せば可いいか、というとね、名も何にもおつしやらないでも、寮の姉さんはよく御存じ、とこういうから、承知した。

その寮はツて聞くと、ここを一町ばかり、左の路地へ入った処、ちようど可い、かえりみち 帰路もそこだというもの。そのまま別れて遣やつて来ると、先刻さつき尋ねました、路地の突当りになる通の内に、一軒あかり灯の見える長屋の前まで来て、振向いて見ると、その婦人おんながまだ立っていて、こつちへ指ゆびさしをしたように見えたけれども、臃おぼろげ気でよくは分らないから、一番ひとつ、その灯あかりを幸さいわい。路地をお入んなさいツて、酒にでも酔つたらしい、爺じいの声で教えてくれた。

何、一々くわ委しいことをお話するにも当らなかつたんだけれど、こつちへ入つて、はじめて、この明い灯あかるあかりを見ると、何だか雪路ゆきみちのことが夢のように思われたから、自分でもしつかり氣を落着け

るため、それから、筋道を謂わないでは、夜中に婦人おんなばかりの処へ、たとえ頼まれたツても変だから。

そういう訳です、ともかくもその頼まれたものを上げましょう、「ひじ」といつて、無造作に肱を張つて、左の胸に高く取つた衣兜かぶしの中へ手を入れた。――

固くなつて聞いていた、二人とも身動きして、お若は愛くるしい頬を支えて白い肱に襦袢の袖口をから擽めながら、少し仰向いて、考えるらしく銀すずのような目を細め、

「何だろうねえ、杉や。」

「さようでございます、」とばかり一大事の、生命いのちがけの、約束の、助けるのと、ちつとも心あたりは無かつたが、あえて客ことばの言

を疑う色は無かったのである。

「待つて下さい、」とこの時、また右の方の衣兜かくしを探つて、小首を傾け、

「はてな、じゃあ外套がいとうの方だった、」と片膝立てたので。

杉、

「私が。」

「確か左の衣兜へ、」

と差さしうつむ俯うつむいた処へ、玄関から、この人のと思うから、濡れた

のを厭いとわず、大切に抱くようにして持つて来た。

敷居の上へ斜ななめに拵ななめげて、またその衣兜へ手を入れたが、冷たか

ったか、慄ぞっとしたよう。

二十一

「可ようございますよ、お落しなさいましても、あなたたちとも御心配なことはないの。」

探しあぐんで、外套をpush遣おしやつて、ちと慌てたように広袖どてらを脱ぎながら、上衣の衣兜へまた手を入れて、顔色をかえて悄しおれてじつと考えた時、お若は鷹揚おうように些さも意に介する処のないような、しかも情の籠こもった調子で、かえつて慰めるように謂いった。

お杉は心も心ならず、憂慮きづかわしげに少年の状さまを瞻みりながら、さすがにこの際喙くちを容いれかねていたのであつた。

此方はますます当惑の色面に顕れ、

「可いじやアありません、可かあない、可かあない、」

と自ら我身を罵るごとく、

「落すなんて、そんな間のあるわけではないんだからねえ、頼んだ人は生命にもかかわる。」と、早口にいつてまた四辺をあたりみまわした。

「一体どんなものでございます。」とお杉は少年に引添うて、渠かれを庇うかばようにして言う。

「私も更めちや見なかった、いいえ、実は見ようとも思わなかったような次第なんです。何でもこう紙につつんだ、細長いもので、受取った時少し重みがあつたんだがね。」

お若はちよいと頷うなずいて、

「杉、」

「ええ、」

「瀬川さんの……ね、あれさ、」と呑込ませる。のみこ

「ええ、成程、貴下あなた、それじゃあ、何でございますよ、抱えの瀬

川さんという方にお貸しなすつたんですよ、あの、お頼まれなす

つた遊女おいらんは、脊の高い、品の可い、そして淋しい顔色かおつきの、ああ

煩いきおいつてゐるもんだからてつきり、そう！」

と勢よくそれにした。

「今夜までに返すからと言つたにやあ言いましたけれども、何、

少姐ねえさんは返してもらおうおつもりじゃございませんのに、やつと

今こつちじゃあ思い出しました位ですもの。」

「何です、それは、」とやや顔の色を直して言った。口うらを聞けば金子らしい、それならばと思う今も衣兜の中なる、指尖てさきに触るるは袂たもとおとし落おとし。修学のためにやがて独逸ドイツに赴かんとする脇屋欽之助は、叔母に今は世になき陸軍少将松島まつしま主税ちかの令夫人を持つて、ここに擲なげうつて差支えのない金員あり。もつて、余りに頼たのみが効いなき虚氣うつけの罪を、この佳人の前に購あがない得て余りあるものとしたのである。

問われてお杉は引取つて、

「ちつとばかりお金子です。」

欽之助は嬉しそうに、

「じやあ私が償おう。いいえ、どうぞそうさしておくんなさい、

大したことならば帰るまで待つてもらおうし、そんなでも無いなら遣つかつて可いのを持つているから。」と思込んで言った。

「飛んでもない、貴あなた下、」と杉。

お若は知らぬ顔をして莞爾にっこりしている。

此方こなたは熱心に、

「お願いだから、可いんだから、それでないと実に面目を失する。こうやって顔を合しても冷汗が出るほど、何きまりだか極が悪いんだ、夜々よるよる中見ず知らずが入込んで、どうも変だ。」

「あなた、可いんですよ、私お金子を持っています、何にも遣わないお小遣こづかいが沢山たんとあるわ、銀のだの、貴下、紙幣さつのだの、」と
いいながら、窮屈くつきそうに坐つて畏かしこまつていた勝色かちいろうらの棲つまを崩

して、膝を横、投げ出したように玉の腕かいなを火鉢にかけて、斜ななめに欽之助おもての面を見た。姿かたちも容も、世にまたかほどまでに打解けた、ものを隠さぬ人を信じた、美しい、しかも蟠わだかまりのない言葉はあるまい。

左の衣兜

二十二

意外な言葉に、少年は呆あきれたような目をしながら、今更顔みまもが瞻あられた、時に言うべからざる綺麗きれいな思おもいが此方こなたの胸にも通じたので。

しかも遠慮のない調子で、

「いづれお詫わびをする、更あらためてお礼に来ましようから、相済まんがどうぞ一番ひとつ、腕車くるまの世話をしておくんなさい。こういうお宅うちだから帳場なじみにお馴染なじみがあるでしょう、御近所ごきんじよならば私が一所いよに跟ついて行くゆから、お前まへさん。」

杉むすめは女の方むすめをちよいと見たが、

「あなた何なんどき時ときだと思おもいなさいます。私わたくしどもでは何でもありやしませんけれども、世間よこじや夜の二時ふたじ過ぎすぎでしょう。

あれあれあの通とおり、まだ戸外おもてはあんなでござございますよ。」

少年せうねんは降りしきる雪ゆきの気勢けはいを身みに感じて、途中ちゆうちゆうを思おもい出したかまた悚ぞつとした様子ようす。座ざに言ことばが途絶とつたえると漂ひようびよう渺びようたる雪ゆきの広野ひろのを隔へて、里さとある方かたに鳴なくように、胸むねには描かかれて、遥はるかに鶏けいの声こゑが

聞えるのである。

「お若さん、お泊め申しませう、そして気を休めてからお帰りなさいまし。

わたくし

私どもの分際でこう申しちやあ失礼でございませうけれども、何だかあなたはお厄日でもいらつしやいますように存じますわ。

お顔色もまだお悪うございませうし、御気分がどうかでございませうが、雪におあたりなすつたのかも知れませぬ。何だか、御大病の前でももあるように、どこか御様子がお寂しくツて、それにしよんぼりしておいでなさいませうよ。

御自分じゃちゃんとしてお在遊いでばすのでございませうけれども、どうやらお心が確たしかじやないようにお見受申します。

お聞き申しますと悪いことばかり、お宅から召したお腕車は破
れたでしょう、松坂屋の前からののは、間違えて飛んだ処へお連れ
申しますし、お時計はなくなりませす。またお氣にお懸け遊ばすに
は及びませんが、お託り下さいましたものも失せませすね。それも
二度、これも二度、重ね重ね御災難、二度のことは三度とか申し
ます。これから四ツ谷下だりまで、そりや十年お傭つけのような
確な若いものを二人でも三人でもお跟け申さないでもございませ
んが、雪や雨の難渋なら、皆が御迷惑を少しずつつけて頂いて、
貴下のお身体に恙のないようにされますけれども、どうも御様子
が変でございませす。お怪我でもあつてはなりません。内へお通い
つけのお客様で、お若さんとどんなに御懇意な方でも、ついぞこ

ちらへはいらつしつた験ためしのございませぬのに、しかもあなた、こういう晩、更けてからおいで遊ばしたのも御介抱を申せという、成田様のおいつけでもございましょう。

悪いことは申しませんから、お泊んなさいまし、ね、そうなさいます。

そしてお若さんもお炬燵こたへ、まあ、いらつしやいまし、何ぞお暖あつたかなもので縁起直しに貴下一口差上げましょうから、

あれさ、何は差置きましてこの雪じやありませんかねえ。「
「実はどういふんだか、今夜の雪は一片ひとつでも身体からだへ当るたびに、
毒虫さしに螫されるような気がするんです。」

と好個の男児何の事ぞ、あやかしの糸いとに纏まとわれて、備わつた身

の品を失うまで、かかる寒さに弱つたのであつた。

「ですからそうなさいまし、さあ御安心。お若さん宜ようございませう？ 旦那はあちらで十二時までには受合お休み、夜が明けて爺やお辻さんが帰つて参りましたら、それは杉が心得ますからねえ、お若さん。」

お杉大明神様と震えつく相談と思おもいの外、お若は空吹く風のように耳にもかけない風情で、恍うっとり惚して眠そうである。

はツと思うと少年よりは、お杉がぎツくり、呆あっけ氣に取られながら安からぬ顔を、お若はちよいと見て笑つて、うつむいて、

「夜が明けると直すぐお帰んなさるんなら厭！」

「そうすりや、」と杉は勢いきなり込み、突いきなり然上着の衣兜かくしの口を、しつ

かりとつかまえて、

「こうして、お引留めなさいましな。」

二十三

寝衣ねまきに着換えさしたのであろう、その上衣と短胸服チヨツキ、などを一
 かかえに、少し衣紋えもんの乱れた咽喉のどのあたりへ押つけて、胸むねに抱いだ
 て、時の間まに窶やつれの見える頤おとがいを深く、俯向うつむいた姿なりで、奥の方六畳の
 襖ふすまを開けて、お若はしよんぼりして出て来た。

襖の内には炬燵こたつの裾すそ、屏風びょうぶの端。

背片手うしろで密そとあとをしめて、三畳ばかり暗い処で姿が消えたが、

静々と、十畳の広室ひろまにあらわると、二室越ふたまた二重ふたえの襖、いずれも一枚開けたままで、玄関の傍わきなるそれも六畳、長火鉢にかんかんと、大形の台洋燈だいランプがついてるので、あかりは青畳の上をすべにつつて、お若の冷たそうな、爪先つまさきが、そこにもちらちらと雪の散るよう、足袋は脱いでいた。

この灯あかりがさしたので、お若は半身を暗がりに、少し伸上るようにして透すかして見ると、火鉢には真しんちゆう鍬くわの大薬罐おおやかんが懸かかつて、も一ツ小鍋こなべをかけたまま、お杉は行儀よく坐つて、艶つやつや々々しく結むすつた円鬚まるまげの、その斑布ばらふの櫛くしをまともに見せて、身動きもせずいにねむり寝ねむりをしてる。

差さ覗のぞいてすつと身を引き、しばらく物音もさせなかつたが、

やがてばったり、抱えてたものを畳に落して、陰々としてしのびな泣きの聲がした。

しばらくすると、密そつとまたその着物を取り上げて、一ツずつ壁の際なる衣いこう桁わたしの互ご。

お若は力なげに洋袴ずぼんをかけ、短胴服チヨッキをかけて、それから上衣を引ひかけたが、持もつたまま手を放さず、じつと立たつて、再まび密そつと爪つ立たつようにして、間まを隔まつてあたかも草双紙の挿絵を見るよう、衣きぬの縞しまも見えて森閑と眠まっている姿を覗のぞくがごとくにして、立た戻もつて、再三衣い桁こうにかけた上衣の衣兜かぶし。

しかもその左の方を、しつかと取とつてお若は思おもわず、

「ああ、厭いやだつていうんだもの、」と絶入ひとりごとるように独ひとりごと言ごとをし

た。あわれこうして、幾久しく契を籠めよと、杉が、こうして幾久しく契を籠めよと！

お若は我を忘れたように、じつとおさえたまま身を震わして、しがみつくようにするトタンに、かちりと音して、爪先へ冷りと中り、総身に針を刺されたように慄と寒気を覚えたのを、と見ると一挺の剃刀であつた。

「まあ、恐いことねえ。」

なお且つびつしより濡れながら袂の端に触れたのは、包んで五助が方へあつらえた時のままなる、見覚えのある反故である。

お若はわなわなと身を震わしたが、左手に取つてじつと見る間に、面の色が颯と変つた。

「わッ。」

というところとぎやと研屋の五助、喚わめいて、むツくと弾はね起きる。炬燵かがみとぎの向うにころりとせ、貧乏徳利を枕にして寝そべっていた鏡かがみとぎ 研の作平、もやい蒲団ぶとんを弾はねかえ 反されて寝惚ねぼげごえ声で、

「何じやい、騒々しい。」

五助は服きものはだけに大の字形なり なごりの名残を見せて、墓ひきがえるのような及およびご腰し、顔かたを突出して目を睜みはつて、障子越かたに紅梅屋敷みつの方を瞻みめながら、がたがたがたがた、

「大変だ、作平さん、大変だ、ひ、ひ、ひ、人殺し！」

「貧乏神が抜け出す前兆しらせか、恐おどしく怯おどされるの、しつかりさつししつかりさつし。」といいながら、余り血相あつのけたたましさに、

捨ておかれずこれも起きる。枕頭まくらもとには大皿に刺身のつま、猪ち

口よくやら箸はしやら乱暴で。

「いや、お前めえしつかりしてくれ、大変だ、どうも恐たたりしい崇たたりだぜ、

一ひとかた方かたならねえ執念だ。」

化粧の名残

二十四

「とうとうお前めえ、旗本の遊おいらん女らんが惚ほれた男の血筋を、一人紅梅屋

敷へ引込んだ、同一理窟おなじで、お若さんが、さ、さ、さ、先刻さつぎ取り上げられた剃刀かみそりでやつぱり、お前、とても身分おもひ違いで思おもが叶かなわぬとツて、そ、その男を殺すというのだい。今行水つかを遣つてら、
「何をいわつしやる、ははははは、風邪を引くぞ、うむ、夢じゃわ夢じゃわ。」

「はて、しかし夢か、」とぼんやりして腕を組んだが、

「待てよ、こうだによつてと、誰か先刻さつきここの前へ来て二上屋の寮を聞いたものはねえか。」

「おお、」

作平も膝を叩いた。

「そういやあある。お前は酔めえつぱらつてぐうぐうじゃ、何かまじ

まじとして私わしあ寐ねられん、一時いつとき半ばかり前に、恐しく風が吹いた中で、確たしかに聞いた、しかも少わかい男の声よ。」

「それだそれだ、まさしくそれだ、や、飛んだこつた。

お前めえ、何でも遊おいらん女に剃刀を授かつて、お若さんが、殺してし

まうと、身だしなみのためか、行水を、お前、行水ツて湯殿でお

前、小桶こおけに沸わきぎましの薬やかん罐の湯を打ぶちまけて、お前、惜気もなく、

肌を脱ぐと、懐にあつた剃刀を啣くわえたと思おもいねえ。硝子戸がらすどの外か

ら覗のぞいてた、私わしが方を仰あおむ向いての、仰向くとその拍子に、がツク

り抜けた島田の根を、邪慳じゃけんに引ひつかんだ、顔色かおつきツたら、先刻さつき見

た幽霊にそツくりだあ、きやあツともいおうじやあねえか、だか

らお前、疾はやく行いつて留とどめねえと。」

「そして男を殺すとてもいうたかい、」

「いや、私が夢はお前の夢、ええ、小じれツてえ。何でもお前が紅梅屋敷を教えたからだ。今思やうつつだろうか、晩方しかも今日とぎたて研立とぎたての、お若さんの剃刀を取られたから、気になって、気になつて堪たまるめえ。」

処へ夜が更けて、尋ねて行くものがあるから、おかしいぜ、此こ奴いつ、鬣ひいきの田之助に怪我でもあつちやあならねえと、直ぐにあとをつけて行くゆつもりだつて、例の臆おく病びようだから叶わねえ、不ぶ性じようをいうお前を、引張出ひっぱりだして、夢にも二人づれよ。」

「やれやれ御苦労千万。」

「それから戸外おもてへ出ると雪はもう留やんでいた、寮の前へ行くゆとひ

つそりかんよ。人騒せなど、思つたけれど、あやまる分と、声をかけて、戸を叩いたけれど返事がねえ。

いよいよ変だと思うから大声で喚わめいてドンドンやったが、成るほど夢か。叩くと音がしねえ、思うように声が出ねえ。我ながら向う河岸の渡わたしがね船を呼んでるようだから、構わず開けて入ろうとしたが掛金がつちりだ。

どこか開く処あがあるめえかと、ぐるぐる寮の周囲まわりを廻る内に、湯殿の窓へあかりがさすわ。

はて変だわえ、今時分と、そこへ行つて覗のぞいた時、お若さんが寝乱れ姿で薬罐を提げて出て来たあ。とまず安心をして凄すげいように美しい顔を見ると、目を泣腫なきはらしています、ね。どうしたかと

思う内に、鹿の子の見覚えある扱しごき一ツ、背後うしろへ縮緬ちりめんの羽織ひを引ひ振つふるつて脱いでな、褌つまを取つて流ながしへ出て、その葉は罐かんの湯ゆを打ぶちまけると、むつとこ霧きりのように湯気が立たつたい、小棚こたなから石鹼せっけんを出でして手てぬぐい拭ぬぐを突つっこ込んで、うつむけになつて顔を洗せんうのだ。ぐらぐらとお前まへその時から島田しまだの根ねがぬけていたろうじゃねえか。

それですつぱりと顔を拭ふいてよ、そこでまた一安心いっしんをさせながら、何なにと、それから丸々まるまるツちい両肌りょうみを脱だいだんだ、それだけでもぞつ悚おそとするのに、考かんえて見みりやちつと変かだけけれど、胸むねの処ところに剃刀かみばさみが、それがお前まえ、

(五助ごすけさん、これでしよう、)と晚方遊おいらん女にょが遣やつた凶あやにそつくりだ。はつと思うトタンに背うしろむき向むになつて仰向おほむきけに、そうよ、

上あがりぐち口くちの方にかかった、姿見を見た。すると髪がざらざらと崩れたというもんだ、姿見に映った顔だぜ、その顔がまた遊おいらん女そのままだから、キヤツといたい。」

二十五

されば五助が夢に見たのは、欽之助が不思議の因縁で、雪の夜よに、お若が紅梅の寮に宿ったについての、委くわしい順序ではなく、遊女の霊が、見棄てられたその恋人の血筋の者を、二上屋むすめの女に殺させると叫んだのも、覚さめぎわ際にフト刺戟された想像とどに留まったのであるが、しかしそれは不幸にも事実であつた。宵におびやか

された名残なごりとばかり、さまでは思わなかつた作平も、まさしく少い声わかの男に、寮の道を教えたので、すてもおかず、ともかくもと大急ぎで、出掛ける拍子に、棒を小腋こわきに引きそばめた臆病おくびょうもののお笑おかしさよ。

戸外おもてへ出ると、もう先刻さつきから雪の降る底に雲の行交ゆきかう中に、薄く隠れ、鮮あらかかに躪あらわれていたのがすっかり月の夜よに変わった。火の番の最後の鉄棒かなぼう遠く響くるわいて廓くわの春の有明なり。

出合頭であいがしらに人が一人通つたので、やにわに棒を突立てたけれども、何、それは怪しいものにあらず、

「お早すまうがすな。」と澄すまして土手の方へ行つた。

積たきぎんだ薪たきぎの小口さえ、雪まじりに見える角の炭屋の路地に入る

と、かすか幽にそれかと思う足あとが、心ばかり飛とびとび々に凹くぼんでいるので、まず顔を見合せながら進んで門かどぐち口へ行くと、内は寂しんとしていた。

これさえ夢のごとくに、胸を轟とどろかせながら、試みに叩いたが、小塚原こつかつぼらあたりでは狐の声とや怪しまんと思わるるまで、如月きさらぎの雪の残月に、カンカンと響いたけれども、返事がない。

猶予ならず、庭の袖垣を左に見て、勝手口を過ぎて大廻りに植込の中を潜くぐると、向うにきらきら水銀の流るるばかり、湯殿の窓が雪の中に見えると思うと、前の溝と覚しきに、むらむらと薄くおよそ人の脊丈ばかり湯気が立っていた。

これにぎよツとして五助、作平、湯殿の下へ駆けつけた時はも

う喘あえいでいた。逡巡しりごみをする五助に入交いれかわって作平、突いきなり然手を懸けると、誰たが忘れたか戸締とじまりがないので、硝子窓がらすまどをあけて跨またいで入ると、雪あかりの上、月がさすので、明かに見えた真しんちゆ鍬うの大薬罐ふた。蓋と別々になつて、うつむけに引ひくりかえつて、濡ぬれてぬぐい手拭おけを桶の中、湯は沢山にはなかつたと思われ、乾き切つて霜なかしのような流が、網を投げた形にびつしよりであつた。

上口から躍込むと、あしのあとが、板の間の濡れたのを踏んで、肝を冷しながら、明あかりめあてを目的に駆けつけると、洋燈ランプは少し暗くしてあつたが、お杉は端然ちやんと坐つたまま、その鬚まげ、その櫛くし、その姿で、小鍋をかけたまま凍つたもののごとし。

ただいつの間にか、先刻さつき欽之助が脱いだまままで置いて寝に行つ

た、結城ゆうぎの半纏はんてんを被きせかけてあつた。とお杉はこれをいって今もさめざめと泣くのである。

五助、作平は左右より、焦いぢつて二ツ三ツ背中をくらわすと、杉はアツといつて、我に返ると同時に、

「おいらんが、遊あそ女いらんが、」と切なそうにいつた。

半纏はお若が心優しく、いまわの際いさわにも勦いたつてその時かけて行つたのであろう。

後にお杉はうつつながら、お若が目まのあたり前に湯を取りに来たことも、しかもまくり手して重そうに持つて湯殿かたの方へ行つたことも、知つていたが、これよりさき朦朧もうろうとして雪ぢらしの部屋着を被きた、品の可いい、脊せきの高い、見馴みなれぬ遊あそ女いらんが、寮の内を、あ

つちこつち、幾たびとなくお若の身に前後して、お杉が自分で立とうとすると、屹きつと睨にらまれて身動きが出来ないのであつたと謂いう。とこういうべき暇いとまあらず、我わがに復かえるとお杉も太いたくお若の身を憂き慮づかつていたので、飛立つようにして三人奥の室まへ飛込んだが、噫あゝ。既に遅おそ矣、雪の姿も、紅梅も、狼藉ろうぜきとして韓から紅くれない。

狂気のごとくお杉が抱き上げた時、お若はまだ呼吸いきがあつたが、血の滴る剃刀を握つたまま、

「済みませんね、済みませんね。」と二声いったばかり、これはただ皮を切つた位であつたけれども暁あけを待たず。

男は深疵ふかでだつたけれども気が確たしかで、いま駆かけつけた者を見ると、

「お前方、助けておくれ、大事な体だ。」

といつたので、五助作平、腰を抜いた。

この事實は、翌早朝、金杉の方から裏へ廻つて、寮の木戸へつ
けて、同一枕おなじに死骸を引取つて行つた馬車と共によく秘密が守ら
れた。

しかし馬車で乗のりつけたのは、昨夜伊予紋へ、少将の夫人つかいの使を
した、橘たちばなという女教師と、一名の医学士であつた。

その診察に因つて救うべからずと決した時、次の室まかしこまに畏つてい
た、二上屋藤三郎すなわちお若の養父から捧げられたお若の遺かきお
書きがある。

橘は取つて披見した後に、枕まくらもと頭かみに進んで、声を曇らせなが
ら判然はつきりと読んで聞かせた。

この意味は、人の想像とちつとも違わぬ。

その時まで残念だ、と呼吸の下でいって、いい続けて、時々齒
齧をしていた少年は、耳を澄して、聞き果てると、しばらくうつ
とりして、早や死の色の宿つたる蒼白な面を和げながら、手真
似をすること三度ばかり。

医学士が領いたので、橘が筆をあてがうと、わずかに枕を擡げ、
天地紅の半切に、薄墨のあわれ水茎の蹟、にじり書の端に、わか
※とある上へ、少し大きく、佳い手で脇屋欽之助つま、と記して
安かに目を瞑つた。

一座肅然。

作平は啜泣をしながら、

「おめでてえな。」

五助が握拳にぎりこぶしを膝に置いて、

「お若さん、喜びねえ。」

明治三十四（一九〇一）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成³」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年1月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第六卷」岩波書店

1941（昭和16）年11月10日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：染川隆俊

2009年5月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

注文帳

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>